

龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報

第 35 号

2026 年 6 月

目 次

(論 文)

英語教材としてのニュースの読解の留意点……………長 富 一 暁…… 1

(研究ノート)

1. 妙好人研究の系譜……………角 岡 賢 一…… 17

2. 龍谷大学留学生別科の沿革
—1985 年の設置から 2026 年の廃止に至るまで—……………三 原 龍 志…… 35

英語教材としてのニュースの読解の留意点

Tips on Reading News as English Language Learning Materials

長 富 一 暁
NAGATOMI Kazuaki

キーワード

[英語教材] English Language Learning Materials ・ [ニュース] News ・ [読解] Reading

第1節 序論

拙稿（長富（2019））は、英語の教材としての英字新聞の利点と問題点を整理した上で、「これらの問題点に対処するためには、教材の選択に注意するのが望ましい」と言明して、ニュースの選択の重要性を強調した。しかし、寡聞ながら、英語の学習者が読みたいニュースについて究明した研究は、意外に少ない。そこで、本稿は、大学の授業を例示しながら、英語教材としてのニュースの読解の留意点について考察する。

第2節 読めるニュース

英語の学習者が読みたいニュースを考慮する前に考慮しなければならないのが、学習者が読めるニュースは何なのか、ということである。

読解されるニュースは印刷版と電子版に大別される。本稿は大学の授業を扱うので、本稿が想定する学習者は大学生であるが、大学の図書館の大多数が印刷物の新聞や雑誌を購読しているので、大学生は印刷版のニュースを入手できる。しかし、インターネットが普及しているので、学習者の大部分が利用するのは電子版のニュースである。例えば、英語の学習者に限定しない一般論であるが、政府の機関の調査（総務省情報通信政策研究所（2025））によれば、2024年に「紙の新聞」の利用者は回答者の36.3パーセントに過ぎない。本稿が想定する学習者は大学生であるが、大学生の多数が含まれる20代では、「紙の新聞」の利用者は11.0パーセントと更に少ない。実際に、後述のように、筆者が担当した授業で、受講者が印刷版のニュースを選択したことはなかった。

電子版のニュースは有料のものと無料のものに二分される。学習者の大部分が利用するのは無料のニュースである。例えば、英語の学習者に限定しない一般論であるが、オクスフォード大学ロイター・ジャーナリズム研究所という海外の大学の調査によれば、拙稿（長富（2019））の時点で最新だった2018年版（Newman（2018））では、1年間以内に有料のインターネット記事を利用したことがあるのは、対象国の平均で回答者の14パーセント、日本で更に少ない10パーセントに過ぎなかった。拙稿（長富（2019））は「国を問わずインターネット記事の有

料化が進んでいるが、世界中で有料のインターネット記事の利用はあまり拡大していない」と言明した。拙稿から7年間の経過したが、状況はほとんど変化していない。本稿の執筆時で最新である2024年版(Newman(2024))では、この数値は対象国の平均で17パーセント、日本で9パーセントである。この9パーセントの中で国外のものを購読したのは10パーセントである。実際に、筆者が担当した授業で、受講者が有料のニュースを選択したことはなかった。

無料のニュースが多いのは新聞社より放送局のインターネット・サイトである。拙稿(長富(2019))は、新聞社のインターネット・サイトを閲覧した上で、「国を問わず2010年頃から、それまで無料で提供していたインターネット記事を有料化する新聞社が増加している」と言明した。アメリカの新聞社は軒並みニュースを有料化していたが、イギリスの新聞社の中に無料のニュースが多い会社があった。拙稿から7年間の経過したが、状況はほとんど変化していない。状況が変化していない、ということは、拙稿が刊行された2019年までに有料化が完了していた、ということである。他方で、放送局の中に無料のニュースが多い会社が多い。電子版のニュースの収入は、購読料、広告料、他社に提供する配信料に大別される(公正取引委員会(2023))ので、電子版のニュースを無料にしている会社は収入を広告から得ていることが多い。

第3節 読みたいニュース

本節では、大学の授業によって英語の学習者が読みたいニュースを例証する。

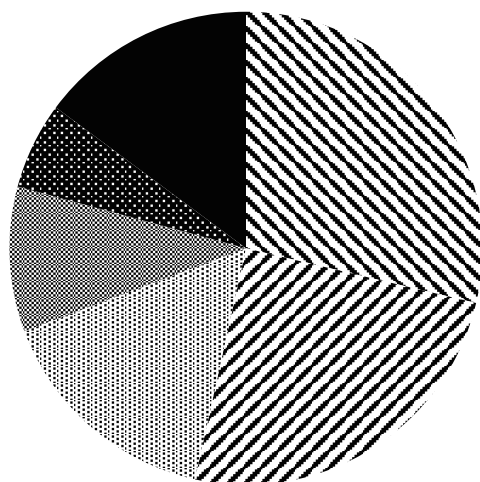
筆者は龍谷大学政策学部で2018年度から2021年度まで「政策学を外国語文献で学ぶ」、2022年度と2024年度に「政策総合英語A」、2023年度に「政策総合英語B」という科目を担当した。これらの科目は、上級生を対象にした選択専攻科目であり、1回生を対象にした必修外国語科目でない。これらの科目の開講期は後期のみである。これらの科目の講義要項は同様であるので、本稿はこれらの科目を一括する。

同科目の意図を拙稿(長富(2019))が言明しているので、長文であるが、引用する。

外国語の学習で重要なことは、繰り返すことである。英字新聞は、毎日、大量の題材が提供されるという意味で、理想的な教材である。学生も、英字新聞に関心がないわけでない、少額であれば料金を負担しても構わないと考えている。しかし、英字新聞を利用するきっかけが少ない、利用法がわからないのではないかと。教員ができることは、授業の教材として英字新聞を利用することなどを通して、英字新聞を利用するきっかけを作ったり、英字新聞の利用法を助言したりすることなのではないかと。筆者が担当する授業では、このようなことを心がけたい。

同科目の進行はこの意図に基づいている。各年度の初回の授業でその年度の全回の授業について発表者を決定する。各発表者は各発表の前回の授業までに教育支援システムの同科目のインターネット・サイトに英語のニュースを掲載する。「記事のインターネット・アドレスの掲載、または、記事をスキャンした電子ファイルのアップロードをして下さい」(龍谷大学政策学部2024年度専攻科目「政策総合英語A」の「本科目についての説明」という資料より)と指示したが、印刷物をスキャンした受講者はいなかった。授業中に筆者が、次の授業の発表者およびニュースを確認し、受講者に予習を指示する。各回の授業では、一文ごとに、①発表者以

外の受講者が和訳を口述する、②発表者が和訳を教室のスクリーンに投影する、③誤訳や補足がある場合に筆者が付言する——という順序で進捗する。授業後に発表者が和訳の全文を同科目のインターネット・サイトに掲載する。これに授業中の解説を反映させるように指示していた。

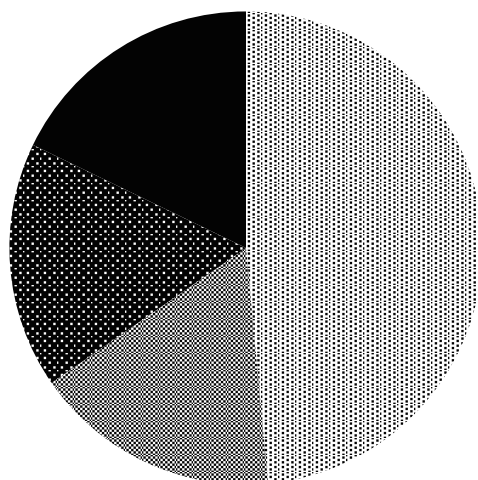


フォックス CNN ガーディアン BBC インディペンデント ほか

図1 受講者が選択した報道機関

注：2020年度から2024年度までの間で各年度の百分率の平均値。フォックスはFox NewsおよびFox BusinessおよびFox Sports、BBCはBBCおよびCBBC (Children's BBC)、インディペンデントはIndependentおよびindy100を含む。「ほか」は5パーセント未満のものの合計。

受講者が選択することが多かった報道機関は、フォックス・ニュースおよびCNNというアメリカの放送局だった。アメリカの報道機関を選択する受講者が多かった理由は、日本の英語の教育でアメリカの影響が強いことである、と推測される。アメリカの新聞社よりアメリカの放送局を選択する受講者が多かった理由は、アメリカの新聞社が軒並みニュースを有料化していることである、と推測される。次に多かったのはイギリスの報道機関であり、ガーディアンとインディペンデントという新聞社とBBCという放送局だった。イギリスの新聞社は、有料化を進めている会社と、無料のニュースが多い会社とに二分されるが、受講者が選択したのは、無料のニュースが多い会社である。

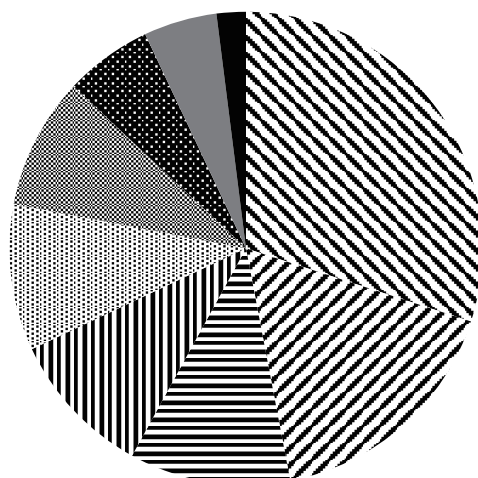


※7日間以内 ※8日間以上14日間以内 ※15日間以上30日間以内 ■31日間以上

図2 受講者が選択したニュースの時期

注：2020年度から2024年度までの間で各年度の百分率の平均値。

受講者が選択したニュースの時期は、傍証であるが、受講者がニュースを探した方法と関連する。1週間以内のニュースを選択した受講者が約半数を占めており、これらの受講者は閲覧時に表示されていたニュースの中から選択した可能性が高い。他方で、2週間以上前のニュースを選択した受講者が3分の1以上を占めており、これらの受講者はサーチ・エンジンなどで関心事を検索した可能性が高い。



社会 科学 経済 政治 環境 生活 文化 教育 スポーツ

図3 受講者が選択したニュースの分野

注：2020年度から2024年度までの間で各年度の百分率の平均値。筆者が分類した。

受講者が選択したニュースの分野を分類したのは筆者であるので、筆者の主観が入っている。ニュースの多数は日本の新聞で国際面に掲載されるようなものであるが、本稿がこれらのニュースを国際に分類した場合に、国際に分類されるニュースが多いため、学習者が読みたいニュースを解明するという本稿の目的が達成されなくなるので、本稿は国際という分野を設定せずにこれらのニュースを他分野に分類した。

最多が社会についてのニュースである。もっとも、この分野は他分野に分類されないニュースを消去法的に含むので、この分野に含まれるニュースは雑多である。次に多かったのが科学についてのニュースである。この分野に含まれるニュースの中で多かったのが健康についてのニュース (Reuters (2010)、Rivas (2020)、Sudhakar (2022)、Vacchiano (2022)、Holcombe (2022)) である。第三に多かったのが経済についてのニュースである。この分野に含まれるニュースの中で多かったのがインターネット業界についてのニュース (Griffin (2021)、Duffy & Thorbecke (2022)、McCallum (2023)、McCallum & Vallance (2023)) である。健康やインターネットについてのニュースに関心が高いのは、受講者自身の生活に直結するためである、と推測される。

政治の分野に含まれるニュースの中で多かったのがロシアとウクライナの外交についてのニュース (McFall (2022)、Hallam, Tawfeeq, & Hu (2022)、Liptak & Vazquez (2022)、Borger (2023)、Edwards (2023)) であり、環境の分野に含まれるニュースの中で多かったのが気候の変動についてのニュース (Watts (2020)、Associated Press (2022)、Rannard (2024)、Weston (2024)) である。これらのニュースに関心が高いのは、ロシアの侵略や気候の変動が世界中に影響を及ぼしていることを反映している。生活の分野に含まれるニュースの中で多かったのが購買についてのニュース (Kasko (2024)、Rousselle (2024)、Marcus (2024)) である。これらのニュースに関心が高いのは、受講者自身の生活に直結するためである、と推測される。文化の分野に含まれるニュースの中で多かったのが映画や放送についてのニュース (Schley (2020)、Monaghan (2021)、Gillespie (2021)、Andrew (2023)) である。これらのニュースを選択した受講者は、映画や放送に関心を持っていた、と推測される。教育の分野に含まれるニュースの中で多かったのが感染症の対策についてのニュース (Giuffrida (2020)、Sorace (2021)、Crispin (2021)) である。これらのニュースに関心が高いのは、受講者自身の生活に直結するためである、と推測される。スポーツについてのニュースを選択した受講者は、自身が関心を持っている競技についてのニュースを選択した、と推測される。

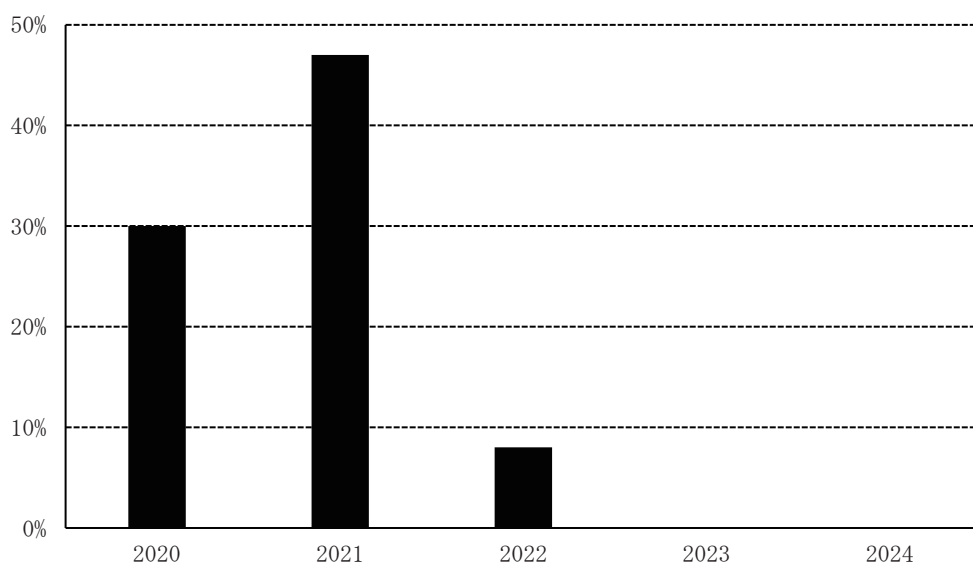


図4 受講者が選択した感染症についてのニュース

注：2020 年度から 2024 年度までの間で各年度の百分率の平均値。

前述のように、感染症についてのニュースを選択した受講者がいたが、感染症についてのニュースは多様な分野に渡るので、分野に関わらず感染症についてのニュースを集計した。感染症についてのニュースを選択した受講者が多かった時期は、感染症の流行が深刻だった時期と一致する。2020 年度に感染症についてのニュースを選択した受講者が 30 パーセントで、2021 年度に約半数まで増加したが、2022 年度に激減し、2023 年度以降にいなくなった。感染症についてのニュースと入れ替わるように、前述のように、ロシアの侵略が重要なニュースになった。感染症についてのニュースは、社会、科学、経済、生活、文化、教育とほとんどの分野に分類されている。これは、感染症が多様な側面に影響を及ぼしたことを反映している。

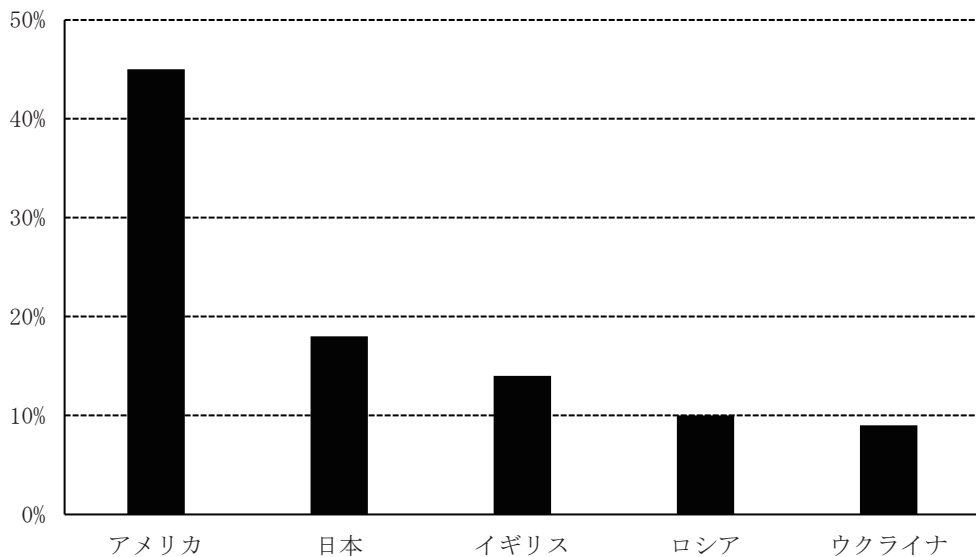


図5 受講者が選択したニュースが言及した国

注：2020年度から2024年度までの間で各年度の百分率の平均値。複数国に言及しているニュースがあるので、合計は100パーセントを超過する。5パーセント未満の国を省略している。

受講者が選択したニュースが言及した国について、最多がアメリカ、第三に多かったのがイギリスである。両国に言及したニュースが多かったのは、前述のように、ほとんど全てのニュースが両国の報道機関のものだったためである、と推測される。アメリカに次いで多かったのが日本である。日本に言及したニュースが多かったのは、日本のニュースが海外でどのように報道されているか、に関心を持つ受講者が多かったためである、と推測される。実際にある受講者は「日本のニュースにしたかったんです」（龍谷大学政策学部2023年度専攻科目「政策総合英語B」の2023年12月6日の受講者の発言より）と言っていた。ほかに多かったのがロシアとウクライナである。両国に言及したニュースが多かったのは、前述のように、ロシアの侵略についてのニュースを選択した受講者が多かったためである。他国は、言及された回数が少ないので、図5で省略されているが、言及されたのは世界中の計30か国に到達する。言及された国が多いのは、受講者が世界中のニュースに関心を持っていることを反映している。

第4節 ニュースを読む時の注意点

本節では、前節と同様に大学の授業によって、ニュースを読む時の注意点を例証する。

(1) 閲覧

最初に注意しなければならないのが、そもそも閲覧できることである。とりわけ注意しなければならないのが、当初に無料であるニュースが事後に有料になるインターネット・サイトである。例えば、ジャパン・タイムズという日本の新聞社のインターネット・サイトは恐らく、あるインターネット・ページを開いた初回に閲覧できるが、同一のサーバーから接続が反復さ

れた後に有料の会員でなければ閲覧できなくなるように設定されていたので、発表者は当該のニュースを閲覧できたが、ほかの受講者がこのニュースを閲覧できないという問題が起こった。この事例では、発表者が、機転を利かせて、学外のサーバーからこのニュースを閲覧し、このニュースの画像（スクリーンショット）を同科目のインターネット・サイトにアップロードした（龍谷大学政策学部 2020 年度専攻科目「政策学を外国語文献で学ぶ」の教育支援システム「manaba」に投稿された「10 月 28 日の記事 3」より）ので、事なきを得た。

閲覧に関連してほかに注意しなければならないのがニュースの更新である。発表者がニュースを閲覧した後にニュースが更新されたので、混乱が起こったことがあった。例えば、メトロというイギリスの新聞社は「Published November 15, 2024 10:39am Updated November 16, 2024 12:07pm」（Milton（2024））と公表と更新の日時を記載していたので、混乱が起こったが、更新があったことを確認できた。他方で、スカイ・ニュースというイギリスの放送局は、更新に関わらず「Sunday 11 December 2022 15:38, UK」（Minelle（2022））と公表の日時のみを記載していたので、更新の日時さえ確認できなかった。

(2) 主義主張

英語の教材としてニュースの問題点の一つは、内容——主義主張——に偏りがあることである（長富（2019））。同科目では、受講者が選択したニュースの中に、賛否が分かれるようなものは少なかった。少なかったものの中から敢えて挙げれば、フォックス・ビジネスというアメリカの放送局によるアメリカ政府の政策についてのニュース（Champ（2024））が挙げられる。フォックス・ビジネスはフォックス・ニュースのチャンネルの一つであるが、フォックス・ニュースは保守的であるので、このニュースは当時の民主党政権を批判していた。授業では、著者がこの報道機関の政治的な姿勢および各党の政策についての解説を付言した。

(3) 表現や語彙

英語の教材としてニュースのほかの問題点は、文章の難易度——表現や語彙——に偏りがあることである（長富（2019））。

科学についてのニュースは当該の領域の専門語を含むので、これが難解であることがある。これに加えて科学についてのニュースで頻出するのが方法論についての語彙である。例えば、「statistically significant（統計的に有意である）」（Vacchiano（2022））、「meta-analysis（メタ分析）」（Holcombe（2022））が挙げられる。これらの語句は辞書に掲載されていることが多いので、和訳は困難でないが、問題は、受講者が意味を理解していないことである。授業では、著者が方法論についての解説を付言した。

生活についてのニュースは、前述のように、購買についてのものが多かったので、商品についての語彙に戸惑いが見られた。例えば、「java（原義は地名であるが、一般名詞は「コーヒー」という意味）」「joe（原義は男性名であるが、一般名詞は「コーヒー」という意味）」（Kasko（2024））、「S'more（「some more」の短縮形であり、洋菓子の名称）」（Rousselle（2024））などが該当する。

スポーツについてのニュースは各競技に特有な表現を含むので、これが難解であることがある。例えば、ゴルフの「under par（規定打数より少ない状態）」「birdie（原義は「鳥」であるが、ゴルフの文脈で規定打数より 1 打少ないこと）」（Murray（2020））などは、ゴルフに馴染みがない受講者にとって難解だったかもしれない。また、サッカーの「European

Championship（各国の代表の大会）」「Champions League（各国のリーグで上位のクラブが出場する大会）」（Associated Press（2024））の相異も、サッカーに馴染みがない受講者にとって、区別が困難だったかもしれない。

（4）難解な文例

受講者にとって難解なのは、多義語を含むセンテンスである。この文例の原文は次の通りである。

The Russian Defense Ministry had denied that there were strikes made on targets near the Ukrainian-Polish state border (Liptak & Vazquez (2022)).

これは、2022年11月にウクライナの迎撃ミサイルがポーランドに落下したので、2名が死亡した、というニュースの一文である。発表者による和訳の原案は次の通りである。

ロシア国防省は、ウクライナとポーランドの州境付近の目標に対して行われた空爆を否定していた（龍谷大学政策学部2022年度専攻科目「政策総合英語A」の2022年11月30日の受講者の発表より）。

誤訳は、この受講者が「state」を「国」でなく「州」と和訳したことである。「state」は、基本的に「国」という意味であるが、アメリカの文脈で歴史的な経緯のため「州」という意味を持つ。同年度でもこの発表の前にこの解説を付言したことがあったが、日本の英語の教育でアメリカの影響が強いため、学生は、「state」を「州」と覚えているので、なかなか理解できない。「state」は「国」や「州」のほかに「状態」などの意味を持つ上に、「述べる」という意味の動詞の用法があるので、間違える受講者が多い。このように、多義語について読者が文脈に沿って意味を選択しなければならない場合に、間違いが多くなる。

ほかに難解なのは、複数の節や句があるため、構造が複雑であるセンテンスである。前記の記事から別文の原文と発表者による和訳の原案を記載する。

Heading into the trip, Biden's advisers were not particularly concerned about the split-screen and, after Democrats' better-than-expected midterm elections, were even less wary of Trump announcing a third bid for president while Biden was in Asia (Liptak & Vazquez (2022)).

この旅行に向けて、バイデンのアドバイザーはスプリットスクリーンを特に気にしておらず、民主党の中間選挙が予想以上に良かったことから、バイデンがアジアにいる間にトランプが3度目の大統領選の立候補を表明することへの警戒感はこちらに薄らいでいた（龍谷大学政策学部2022年度専攻科目「政策総合英語A」の2022年11月30日の受講者の発表より）。

各語は訳出されているが、発表者が理解していないような印象を受けたので、発表者に「各

部分の訳はそれで良いんですけど、この順番で意味わかっています？」（龍谷大学政策学部 2022 年度専攻科目「政策総合英語 A」の 2022 年 11 月 30 日の筆者の発言より）と聞いたところ、発表者が素直に「ちょっとわかりません」（同日の受講者の発言より）と答えたので、解説した。このように、構造が複雑であるセンテンスについて、受講者がセンテンスの構造や文意を理解できていないことが多い。

(5) 翻訳ソフト

近年に翻訳ソフトが普及している。同科目の受講者の中に学期末のアンケートで翻訳ソフトに言及した学生がいたので、引用する。

翻訳作業は一番しんどかった。だんだん、翻訳機にたよってしまい、自分の復習がおろそかになってしまった。（龍谷大学政策学部 2022 年度専攻科目「政策総合英語 A」の「2022 年度 2 学期末アンケート」より）

傍証であるが、同科目で翻訳ソフトが普及したのが 2021 年度でないか、と推測している。これは、同年度の後半に受講者の和訳に間違いが急減したからである。受講者の英語力が向上したという理由もあったかもしれないが、2022 年度に学期の最初から間違いが多くなかったことと、前述のように、2021 年度に翻訳ソフトに言及した受講者がいたことから、振り返れば、2021 年度の後半から翻訳ソフトを使用する受講者が増加したのでないか、と推測している。但し、翻訳ソフトの和訳は、逐語訳であるため、必ずしも日本語としてわかりやすくないので、受講者が翻訳ソフトの和訳で文意を理解できない懸念がある。

(6) 受講者の欠席

本稿の主題から外れるが、同科目の運営で困惑したのが受講者の欠席である。最大の問題は、発表を指定した授業で受講者が発表しないことだった。担当者の立場では、同科目を登録した全受講者に発表の機会を与えなければならない。しかし、同科目の単位を諦めた受講者が、発表を指定した授業でニュースを用意しなければ、その授業の教材がないという事態が起こる。授業では、発表者がニュースを用意しなかった時に、著者がニュースを用意した。発表時の欠席ほど深刻でないものの、欠席が続く受講者も散見された。発表後に、安堵のためか、欠席が続く受講者もいた。

脱落者が出る背景の一つは、同科目が選択科目であることである。同科目は必修でないので、同科目の単位がなくても、学生は卒業できる。そして、同科目では、期末試験や課題を実施しなかったものの、発表時はもちろん、他受講者が発表する授業でも、受講者は予習しなければならないので、毎回の宿題がほかの選択科目に比べて多い。脱落者が出るのを防ぐために、講義要項に「受講者は毎回の授業の前後で宿題をしなければなりません。欠席する受講者や宿題をしない受講者がいれば、ほかの受講者に迷惑が掛かりますので、必ず宿題をして出席して下さい。」（龍谷大学政策学部 2024 年度専攻科目「政策総合英語 A」のシラバスより）と記載した。しかし、学期の開始時に意欲が高まるが、学期中に宿題の多さのため意欲が低下する受講者があるので、脱落者を防ぐことができなかった。

(7) 受講者の感想

最後に、同科目についての受講者の感想として、学期末のアンケートの回答を紹介する。

英記事などを積極的に目に通しました（龍谷大学政策学部 2020 年度専攻科目「政策学を外国語文献で学ぶ」の「2020 年度 2 学期末アンケート」より）

（この講義を通じて身につけることができた能力についての回答）英文を読みニュースを理解する能力。（龍谷大学政策学部 2022 年度専攻科目「政策総合英語 A」の「2022 年度 2 学期末アンケート」より）

他国の状況にも意識を向けることで、日本に与える影響の背景を学べることができたと思う。知らないことを知ることの重要性を学んだ。（龍谷大学政策学部 2022 年度専攻科目「政策総合英語 A」の「2022 年度 2 学期末アンケート」より）

（この講義を通じて身につけることができた能力についての回答）英語圏のニュースを読むことで英語の知識を用いて内容を理解し、解決策について考える力。（龍谷大学政策学部 2023 年度専攻科目「政策総合英語 B」の「2023 年度 2 学期末アンケート」より）

英文の記事を翻訳、そして発表した。英文に対する苦手意識が低減し、今後も英語に触れていこうと思った。（龍谷大学政策学部 2024 年度専攻科目「政策総合英語 A」の「2024 年度 2 学期末アンケート」より）

（この講義を通じて身につけることができた能力についての回答）英文の記事から、世界情勢を知ることができる能力。（龍谷大学政策学部 2024 年度専攻科目「政策総合英語 A」の「2024 年度 2 学期末アンケート」より）

肯定的な回答が多いのは、筆者が選択したからでない。意欲的な学生が回答することが多いので、回答が肯定的になる傾向がある。もっとも、それを差し引いても、少なくとも意欲的な学生には、同科目の意図が理解されているということであり、担当者として喜んでいる。

第 5 節 結論

このように、英語の学習者が選択する報道機関についてアメリカとイギリスの会社が多いが、これは、両国が英語圏の代表国であるためである。放送局を選択する学習者が多いが、これは、放送局の中に無料のニュースが多い会社が多いためである。ニュースを探す方法は、直近のニュースの中から選択する学習者と、関心事を検索する学習者に二分される。ニュースの分野について、世界中で話題になっているもの、学習者に身近なもの、学習者自身が興味を持っているものが多い。ニュースが言及する国について、アメリカとイギリスという英語圏の国、および、学習者自身の出身国が多い。他方で、言及された回数が少ない国に目を向ければ、世界中の国が言及されていた。

本稿の限界は、本稿が実例としたのは計1科目に過ぎないことである。複数の大学の複数の学部で実施される複数の科目を比較すれば、本稿と相異なる知見が得られる可能性がある。もっとも、計1科目に過ぎないが、本稿の知見も、今後になされる研究の発展の土台として有用である。

本稿の意義は、英語の教材としてのニュースの利用について実証したことである。確かに、本稿の知見は新奇でない。学習者の関心が高いニュースについての本稿の知見は、想像の範囲内である。しかし、本稿の独自性は、数年間に渡る実際の授業の集計を通して、現状が想像の通りであることを確証したことである。

今後、英語の学習者がどのようなニュースを選択するか、ということは、大半の学習者が無料の電子版のニュースを利用しているので、電子版のニュースの有料化に影響される。現時点では、放送局の中にニュースを無料にしている会社が多くあるおかげで、教材の入手を無料でできる。しかし、電子版のニュースを有料化する放送局が増加するなど、状況が変化すれば、教材が制限されることなどが懸念される。

謝辞

本稿を計画していたので、全年度で、同科目の資料に「授業の概容は、授業の改善のために、受講者が特定されない形で、公表される場合があります。」（龍谷大学政策学部2024年度専攻科目「政策総合英語A」の「本科目についての説明」という資料より）のように記載し、授業中に口頭で確認した。2024年度までに筆者が担当した同科目の受講者の累計は、百数十名に上る。同科目がこれらの受講者の将来に貢献することを祈念している。

引用文献（教材として使用されたニュースを別記している）

公正取引委員会（2023）『ニュースコンテンツ配信分野に関する実態調査報告書』。

総務省情報通信政策研究所（2025）『令和6年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』。

長富一暁（2019）「英字新聞のインターネット記事の有料化を背景とした英語教材の実際」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28号、55頁～70頁。

Newman, N. (2018), "Section 1 Executive Summary and Key Findings", Newman, N. with Fletcher, R., Kalogeropoulos, A., Levy, D. A. L., & Nielsen, R. K., *Digital News Report 2018*, Oxford, Reuters Institute for the Study of Journalism, University of Oxford.

Newman, N. (2024), "Section 1 Executive Summary and Key Findings", Newman, N. with Fletcher, R., Robertson, C. T., Arguedas, A. R., & Nielsen, R. K., *Digital News Report 2024*, Oxford, Reuters Institute for the Study of Journalism, University of Oxford.

教材として使用され、本稿が引用したニュース

Andrew, S. (2023, October 31), "How 'Nightmare Before Christmas' went from cult classic to beloved Disney property", *CNN*, edition.cnn.com/2023/10/31/entertainment/nightmare-before-christmas-30th-anniversary-disney-cec.

Associated Press (2022, December 15), "Largest water provider in the US declares drought emergency", *Fox Business*, www.foxbusiness.com/industrials/largest-water-provider-us.

declares-drought-emergency.

- Associated Press (2024, October 8), "Lionel Messi lauds 'magical' Andrés Iniesta in farewell post to retiring Spain, Barcelona legend", *Fox Sports*, amp.foxsports.com/stories/soccer/lionel-messi-lauds-magical-andres-iniesta-farewell-post-retiring-spain-barcelona-legend.
- Borger, J. (2023, September 19), "Zelenskiy accuses Russia of genocide and urges world leaders to attend peace summit", *Guardian*, www.theguardian.com/world/2023/sep/19/zelenskiy-russia-genocide-un-general-assembly.
- Champ, N. (2024, October 17), "How the Biden-Harris administration threatens your retirement savings", *Fox Business*, www.foxbusiness.com/markets/how-biden-harris-administration-threatens-your-retirement-savings.
- Crispin, J. (2021, October 11), "US schools gave kids laptops during the pandemic. Then they spied on them", *Guardian*, www.theguardian.com/commentisfree/2021/oct/11/us-students-digital-surveillance-schools.
- Duffy, C. & Thorbecke, C. (2022, November 25), "Elon Musk says he will begin restoring previously banned Twitter accounts next week", *CNN*, edition.cnn.com/2022/11/24/tech/elon-musk-amnesty-poll.
- Edwards, C. (2023, November 6), "Zelensky invites Trump to Ukraine and says former president 'can't bring peace' because of Putin", *CNN*, edition.cnn.com/2023/11/06/europe/ukraine-zelensky-trump-invitation-intl.
- Gillespie, B. (2021, November 2), "'The View' clashes over coronavirus vaccine mandates: 'It's not only about you'", *Fox News*, www.foxnews.com/media/the-view-coronavirus-vaccines-choice.
- Giuffrida, A. (2020, November 21), "Italian children take lessons outside school in protest at Covid closures", *Guardian*, www.theguardian.com/world/2020/nov/21/italian-protests-covid-school-closures-anita-iacovelli-turin.
- Griffin, A. (2021, October 29), "Facebook changes name to 'Meta' as it focuses on metaverse and tries to move on from controversies", *Independent*, www.independent.co.uk/tech/facebook-meta-name-new-metaverse-b1947245.html.
- Hallam, J., Tawfeeq, M., & Hu, C. (2022, September 21), "Zelensky calls for Russia to be stripped of UN veto power", *CNN*, edition.cnn.com/2022/09/21/world/zelensky-russia-veto-power.
- Holcombe, M. (2022, October 31), "Even less than recommended amounts of caffeine while pregnant could impact your child's life", *CNN*, edition.cnn.com/2022/10/31/health/caffeine-stature-early-childhood-study-wellness.
- Kasko, B. (2024, September 26), "National Coffee Day: Where to find the best deals for free drinks", *Fox News*, www.foxnews.com/food-drink/national-coffee-day-where-find-deals-free-drinks.
- Liptak, K. & Vazquez, M. (2022, November 16), "Biden says allies working in 'total unanimity' after Russian-made missile falls on Poland, killing 2", *CNN*, edition.cnn.com/2022/11/15/politics/biden-bali-g20-summit-final-day.

- Marcus, L. (2024, November 14), “‘The Disneyland of American grocery stores’: How Trader Joe’s became a tourist hot spot”, *CNN*, edition.cnn.com/travel/trader-joes-tourist-attraction-cult-products.
- McCallum, S. (2023, October 20), “Elon Musk says X to have two new premium tiers”, *BBC*, www.bbc.com/news/technology-67167804.
- McCallum, S. & Vallance, C. (2023, October 20), “Amazon trials humanoid robots to ‘free up’ staff”, *BBC*, www.bbc.com/news/technology-67163680.
- McFall, C. (2022, July 22), “Russia, Ukraine sign grain export deal in Istanbul, averting threat amid global food crisis”, *Fox News*, www.foxnews.com/world/russia-ukraine-sign-grain-export-deal-istanbul-averting-threat-global-food-crisis.
- Milton, J. (2024, November 15), “Scientists reveal ‘supremely intelligent’ creature that will rule Earth if all humans die”, *Metro*, metro.co.uk/2024/11/15/scientists-reveal-creature-will-rule-earth-humans-die-21999270/.
- Minelle, B. (2022, December 11), “Ministers ‘dangerous and irresponsible’ for not talking to striking nurses - as union warns people will die”, *Sky News*, news.sky.com/story/ministers-dangerous-and-irresponsible-for-not-talking-to-striking-nurses-as-union-warns-people-will-die-12765984.
- Monaghan, B. (2021, October 15), “Netflix fires organiser of trans walkout after ‘revealing \$25m cost of Dave Chappelle special’”, *indy100*, www.indy100.com/news/netflix-fires-organiser-trans-walkout-b1939399.
- Murray, E. (2020, November 15), “Unstoppable Dustin Johnson cruises to record-breaking first Masters victory”, *Guardian*, www.theguardian.com/sport/2020/nov/15/unflappable-dustin-johnson-cruises-to-masters-victory.
- Rannard, G. (2024, September 28), “Penguin chicks survive tearaway iceberg”, *BBC*, www.bbc.com/news/articles/c3wp4qnljd1o.
- Reuters (2010, August 18), “Scientists Want to Bring Back LSD and Mushrooms”, *Fox News*, www.foxnews.com/science/scientists-want-to-bring-back-lsd-and-mushrooms.
- Rivas, K. (2020, December 21), “Amid evolving strains, COVID-19 vaccines likely need updates every 3 years, former FDA chief Gottlieb says”, *Fox News*, www.foxnews.com/health/evolving-strains-covid-19-vaccines-updates-3-years-gottlieb.
- Rousselle, C. (2024, October 4), “Halloween Horror Nights event offers 5 frightful foods and a chilling drink: ‘Viral sensation’”, *Fox News*, www.foxnews.com/food-drink/halloween-horror-nights-frightful-foods-chilling-drink.
- Schley, M. (2020, October 23), “‘Demon Slayer’ destroyed box-office records despite the pandemic, but why?”, *Japan Times*, www.japantimes.co.jp/culture/2020/10/23/films/demon-slayer-box-office-record.
- Sorace, S. (2021, September 22), “Principal of Washington state elementary school says students need to wear masks while chewing lunch: report”, *Fox News*, www.foxnews.com/us/principal-washington-elementary-school-masks-lunch.
- Sudhakar, S. (2022, September 28), “Melatonin should be avoided in children unless directed

by a health care professional, says sleep academy”, *Fox News*, www.foxnews.com/health/melatonin-avoided-children-unless-directed-health-care-professional-sleep-academy.

Vacchiano, A. (2022, October 18), “Chemical hair-straightening products may increase uterine cancer risk: NIH study”, *Fox News*, www.foxnews.com/health/chemical-hair-straightening-products-may-increase-uterine-cancer-risk-study.

Watts, J. (2020, October 22), “Alarm as Arctic sea ice not yet freezing at latest date on record”, *Guardian*, www.theguardian.com/world/2020/oct/22/alarm-as-arctic-sea-ice-not-yet-freezing-at-latest-date-on-record.

Weston, P. (2024, November 29), “‘Climate-induced poisoning’: 350 elephants probably killed by toxic water”, *Guardian*, www.theguardian.com/environment/2024/nov/29/mystery-mass-die-off-deaths-elephants-toxic-water-botswana.

妙好人研究の系譜

A History of the Studies of *Myokonin*

角 岡 賢 一
KADOOKA Ken-Ichi

ABSTRACT:

In this paper, the focus will be put on the history of the studies of *Myokonin*, literally 'the blessed.' They are the pious believers of the Joudo-Shinshu sect. Interestingly, only the faithful believers of this sect have been distinguished as *Myokonin*, never for those of the other sects. The *Myokonins* followed the Joudo-Shinshu doctrine listening to the preachings, and some of them left enormous writings such as anthems, poems, and *tankas*. Since the first biographies of them were compiled in the 1750s, studies of *Myokonin* themselves have been established as one branch of the Buddhism.

KEYWORDS:

浄土真宗 (Joudo-Shinshu Sect)、他力門 (salvation by faith alone)、妙好人 (*Myokonin*, the blessed)、かしこだて (pretend-to-know)

第一節 はじめに

浄土真宗には、篤信の在家信者として妙好人という人物像が伝統的に作り上げられてきた。他宗派にも篤信の信者は居たであろうが、何故か門徒だけが妙好人と呼ばれて区別されてきた。背景としては他力門として戒律や修行を排し、専ら聞法によって信仰を篤くするという考え方があったのであろう。古くは蓮如上人と同時代である赤尾の道宗翁が知られているが、これは五百年も前の人物である。妙好人がより一般化するの江戸時代に入ってからである。大和の清九郎翁が元禄年間の生まれで最も早く、続いて長門のお園媼は江戸後期で二百年ほど前、幕末の頃に妙好人として最も名高い石見の才市翁が現れる。このような妙好人を研究する歴史も、古くからあった。妙好人の言動は口承で伝えられたこともあるが、書かれた記録として残っていれば、それは研究であると言える。そもそも自らが自分の言行を書き残すようでは妙好人とは言えない。周囲の人が感銘を受けて、「これは記録に留めておかねば」というように積み重ねられたのが歴史になったと言えるであろう。

近代、あるいは現代と言える時代には、鈴木大拙居士が本格的な妙好人伝を上梓するようになる。これは時代が下っているので、何人もの妙好人を様々な角度から比較対照することもできる。大拙居士は外国にも長く暮らしていたので、仏教以外との宗教とも学問的な見地で論じることができた。世紀の替わり目を経ると、関山和夫氏らの書が次々と世に出されてきた。こ

れをどのように捉えるべきであろうか。一つ考えられる事情としては、妙好人が同時代人ではなくなり、「歴史」として位置付けられるようになったという経緯があるのではないであろうか。現代社会が余りにも複雑になってしまったために、素朴に信仰だけに生きていくという考え方は実質的に不可能である。これは善悪の問題ではない。時代の必然とも言えるべき変化であり、歴史の大きな流れに逆らうことはできない。これから「妙好人」と位置付けるに相応しい篤信の門徒が現れる可能性も皆無ではないであろうが、時代の変化がそれを許さないように思われてならない。

本研究はこのような妙好人研究の系譜を辿り、真宗に特有である妙好人という生き方について考察を進めていく。過去の妙好人研究でも、妙好人が他宗派の篤信な信者とのように異なっているか等諸点が考察されていた。本研究もその延長線上として、妙好人研究の系譜を学問的に論じてみることを目的とする。本研究によって、妙好人という生き方を通して真宗の教義や布教の歴史などについても理解が深まることを希望するものである。

第二節 妙好人列伝

本節では拙論「妙好人という生き方」から引用して、これまで研究されてきた主な妙好人について概観を行う。

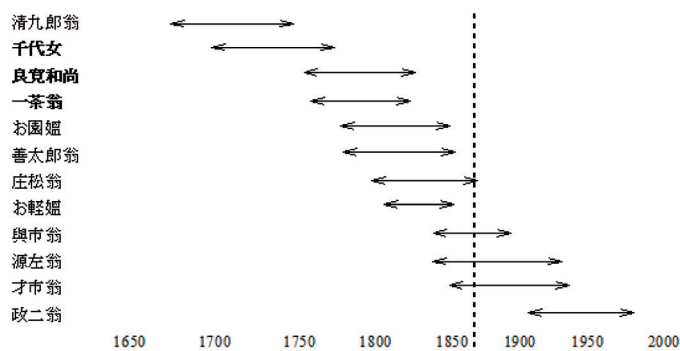
直林師の『妙好人』という著は、副題を「日暮しの中にほとばしる真実」とし、真宗固有の信心を紹介している。この分野では最も新しい刊行であり、ここを手がかりとして妙好人について知るには最適と思われる。まずは冒頭で「妙好人とは、苦悩に満ちた日暮の中で煩惱に染まらぬ信心の花を咲かせた、市井の浄土真宗念仏の行者」と紹介している。妙好人の定義というよりは、直林師が妙好人をどのように捉えているかという見方であろう。拙論「妙好人という生き方」で紹介した十人に加えて、以下で追加する三人は太字で示した。この三人は、時代的に清九郎翁とお園媼の間を埋めるような生没年代になっている。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| (1) 赤尾の道宗翁（生年不詳～1516） | 大和の清九郎翁（1680～1750） |
| 加賀の千代女（1703～1775） | 良寛和尚（1758～1831） |
| 一茶翁（1763～1828） | 三河のお園媼（1777～1853） |
| 石見の善太郎翁（1782～1856） | 讃岐の庄松翁（1799～1871） |
| 長門のお軽媼（1801～1856） | 棕田与一翁（1841～1893） |
| 因幡の源左翁（1842～1930） | 浅原才市翁（1850～1932） |
| 斎藤政二翁（1919～1984） | |

ここで仮に「翁、媼」というように敬称を附しておいたが、一般的に妙好人として「真価を発揮する」とようになるのは老境に入ってからと考えるのが自然であろうという前提に基づくだけに過ぎない。実際の生涯では、青年や壮年代から篤信の人となっていたこともあり得る。生年が不詳である道宗翁を除けば、十二人の平均生涯は六八歳余りである。現代のような長寿化を迎える数十年前まで「人生五十年」と言われていた事を思えば、総じて妙好人は長寿を保ったと言える。最も短命だったのがお軽媼で行年五十六、長命は源左翁で八十八である。信仰について思索を深めるにはそれ相応の時間を要するというような事情が窺えそうである。男女別

では、男性十人に対して女性三人という比率である。

ここで理解のために、生存年代を図示してみよう。時代が離れている道宗翁を除く十二人は、このようになっている。明治維新の年は破線を引いて示してある。



前稿「妙好人という生き方」では清九郎翁とお園媼の間に二十七年という間隔が空いていたが、今回三人を追加したことでその隙間が埋まった。このことによって、江戸時代半ばから幕末までの妙好人史が連続してたどれるようになった。

蓮如上人と同時代人であった道宗翁は、恐らく応仁の乱を経験したことであろう。世は已に戦国時代に入っており、周囲は落ち着いて信心に専念できるような情勢ではなかった筈である。戦乱が治まって江戸時代に入った清九郎翁の生年は、ちょうど五代綱吉將軍の治世が始まった年であった。島原の乱からも半世紀が過ぎて、世の中は落ち着いていた。それから六代家宣將軍と七代家継將軍（数え八歳で逝去）、八代吉宗將軍を経て翁の没年は九代家重將軍の世であった。翁の行年は数えの七十一と、当時としては長命の部類と言えるであろう。

お園媼、善太郎翁、庄松翁、お軽媼は幕末の世を生きた。庄松翁は行年七十二と長命で、維新を生き延びた。逆にお軽媼は五十六歳で没したのであるが、この辺りが当時の平均寿命であろうか。

與市翁、源左翁、才市翁は幕末の世に生を受けて明治維新を経た。世の中が大きく変わっていく中でも信心を貫いた生き方は尊い。政二翁は大正時代のお生まれで、昭和の世を生ききった。明治維新からは西南戦争以降日清、日露、第一次大戦、日中戦争と太平洋戦争と国内外で戦が絶えることはなかった。平和憲法によって日本は戦をすることがなく、親鸞聖人の「世の中、安穩なれ」という念願は表面的には実現されたようにも思われる。しかし聖人や平和憲法の精神を更に突き進めて、真に全世界から争いがなくなるようにと祈念して行動に移すのが門徒としての心得であると考え。近年の自民党政権の右傾化に見られるように、日本が核兵器を造って保持するなど軍靴の足音が聞こえてくるような時世はご開山聖人のみ教え「世の中安穩なれ」とは相容れないと言えよう。

戦後は高度経済成長期を経て、物質的な豊かさは急速に満たされた。電化製品が普及したこ

とによって炊事や洗濯、入浴という家事労働は負担が大きく軽減された。しかしその分が精神生活の充実に振り向けられたかという点、全く逆であったというように思われる。経済活動が拡大したのに伴い、拝金主義が幅を利かせるようになった。経済至上主義の下に、精神生活が蔑ろにされるようになってきたのではないか。妙好人のように、「信心が後生の大事」と素朴に考える人物像は顧みられることが皆無となってしまったのであろうか。

まずは上掲十人の妙好人について、その生き方をざっくりと纏めてみる。これも拙稿「妙好人という生き方」から抄引用とする。

道宗翁

道宗翁は蓮如上人と同時代の人であり、永正十三年に没している。今から約五百年前である。時代的には、妙好人の祖とも言えるべきである。上人のお側にあるときは警護役を務めたり、弟子として教えを請うたというような経緯が『御一代記聞書』に記されている。

越中の五箇山は冬になると雪に埋もれる土地であるが、月に一度は七里離れた井波別院までお勤めに通ったという。赤尾の里は、その五箇山でも飛騨に近い、最も奥まった地であった。道宗翁は刻苦勉励の人であった。蓮如上人の御文を二巻二十三通写し、お寺に所存していた。それだけでは足らぬ、上人直筆の御文章をと懇願したが、上人は「文ハトリオトシ候ホトニ、タ・心ニ信ヲタニモトリ候へは、取りオトシ候ハヌ」と返した。文に書かれたものではなく、信心こそが根本であるぞよ、文はなくとも直々に教えは伝えるというお諭しであった。しかし翁が翌年上洛した折に、一文を認めて下賜されたという。また直林師『妙好人』によると、蓮如上人は三十歳前後の道宗翁を評して「後生ヲ大事ト思テ、仏法ニ心ヲカケ此六年ノサキヨリ当年マデ、毎年上洛」と褒めていたという。

大和の清九郎翁

大和の清九郎翁は延宝八年の生まれで寛延三年に没している。記録に残っているのは今から約三百年前であり、道宗翁の時代からは二百年ほど後になる。清九郎翁の生き方は四十年ほど後である享保六年生まれの学僧仰誓和上の心を捉え、初の妙好人伝が編まれることになっていく。和上は、篤信者であったという清九郎翁の噂を聞き及び、二度に及んで大和まで足を運んだ。清九郎翁が没する前年のことであった。清九郎翁に接した和上は「歓喜ノ泪ニムセビ」、「吾身ノ浅マシキコトモ実ニ思ヒ知」らされたという。ここに、意識的に同時代の妙好人の存在を知って興味を持ち、遠路遙々と訪れるという先例になった様子を窺うことができよう。間接的に伝え聞くだけではなく、直にその人柄に接して信心の有様を見聞きたいという熱意が表れている。この事績によって、仰誓和上自らも妙好人に列せられたも同然と言えるであろう。

清九郎翁、生まれは大和国高市郡矢田村であったが、幼少の頃に母の生地であった丹生谷村に移り、幼い頃に父を亡くした。母の生家は、大谷派因光寺の門徒であった。やがて下市近辺に奉公に出たが、母を思いやって仕事を終えた夕方に奉公先から母の元に帰り、身の回りの世話をし再び奉公先に戻ったので「モハヤ加減モ損シタル冷ナル」夕餉を感謝のうちに食したと伝えられている（直林師の著）。しかし生来読み書きや勘定もままならなかった故か、丁稚奉公を辞めてしまい次第に身を持ち崩していった。母はそのような息子を立ち直らせようとして、法座で知り合いになった女性と娶せた。それでも清九郎の暮らしぶりは改まらなかったが、夫婦の間にこまんという女の子が生まれた。その連れ合いが病に斃れて世を去ったのを契機とし

て「我に先達ハ知識なりといひて、法縁を慕ふ」と改心したという。それから後に、妙好人としての生き方が始まって今に至るまで語り継がれているのであろう。

更に、娘のこまんについても連れ合い選びで自分自身と重なるような由縁が伝えられている。こまんの相手は、無頼者と悪評高かった久六という男であった。その頃は翁が篤信の門徒となっており、日々拝読していた御文章を、久六は事もあろうに燃えさかる囲炉裏の火に投げ込んでしまった。翁はその御文章を火の中から拾い上げ、「如来の凡夫済度」という御苦勞と重ねて味わわれたという。これを契機として久六も改心して念仏者になったというのであるから、自分だけではなく周囲に影響を及ぼすような存在になっていったという事績である。

三河のお園媼

直林師の年代記によると生まれは安永六年であるが、藤師は没年から逆算して安永か天明頃としか特定されていない。没年は幕末の嘉永六年、安永六年生まれとすると行年七十七歳である。清九郎翁より百年以上、後代の同行である。

藤師の説くところによると、「あんたのお師匠はどなたで御座いますか」という問いに対し「わたしの師匠は三文の柱暦のようなものであろうぞえのう」という答えであったという。これは、師匠は誰でも柱暦のように間違いはないというように解されているが、当時の碩学であった香月院深勵和上や開悟院正慶和上の教えに感化されたものと察せられる。ある折りに媼は蓮如上人の御文章に「往き易くして人無し」とあった教化に不審を起し、六十里の道を遙々と京に上って香月院和上の教えを請うた。和上は「往き易くして人なしというはなあ、お前やわしがまだ飯食うて娑婆に生きておるさかい、お浄土に人がないと仰せられることじゃぞ」とお諭しになったという。媼は「それではこの園がまだ飯食うて娑婆に生きているからお浄土に人がないとは有り難い、有り難い」と躍り上がって喜んだ。ただその一言を聞くために、千里の道も遠からずと足を運んだのであった。

石見の善太郎翁

石見という地は、「石州学派」と称されるように真宗教義を極めた土地柄であり、それに応じるかのように多くの妙好人も出ている。善太郎翁もその一人である。生まれはお園媼の五年後に当たる天明二年で、没年は三年後の安政三年、行年七十五歳であった。お園媼とほぼ同年代と考えて差し支えなからう。家は那賀郡有福村にあり、千田村浄光寺の門徒であった。

翁は伊藤師『妙好人めぐりの旅』では有福ありふくの善太郎さんとして採り上げられているが、そこで「草餅説法」が伝えられている。翁は生涯に九度も本山詣りを果たしたが、行き帰りに芸州可部で同行の家に立ち寄ることを常としていた。ある年、翁が立ち寄って出立した朝のこと、裕が一枚行く方知れずになった。お手伝いさんに尋ねたところ、「善太郎さんが持って行きました」との返答で、家の者も皆それを信じた。その後、可部の同行は有福温泉に湯治に来て善太郎さんの家に寄って盗みを咎立てた。すると翁は「そりゃ、悪うござんしたのう。家内がおりませんで、着物はどこかわかりません。これでまどいますけえ、どうかこらえてやんなさい」と裕の代金を弁償した。加えて、「何もないけど、この仏様のお下がりの草餅を持って帰って、家の人にあげてやんさい」と草餅を渡した。家に帰った可部の同行は「餅に罪はない、皆で食べよう」と配ったが、お手伝いさんだけがどうしても食べようとしない。理由を尋ねると、「私のような罪深い者がこの餅を食べたら、どのように恐ろしい報いを受けるかしれません。

あの裕は、私が盗んだのです」と白状した。家の者は皆驚いて「善太郎さん、知らずにいたとは言いながら、散々罵ったことの恐ろしや。勿体ない、勿体ない」と詫びて後にお金を返したという。無実の善太郎さんに罪を着せるという後味の悪い挿話であるが、ここにも妙好人としての心得が話に盛り込まれているように思われる。即ち、どんなことがあっても他人に罪科が及ぶことのないように、仮に自分が罪を被ることになろうとも甘んじてそれを受けるという態度である。近代的な価値観から判断すれば、正邪を曲げて責任の所在を曖昧にするのは好ましくないと考えるであろう。しかしこのように、真理を枉げてでも利他を図ろうとする妙好人の考え方と近代合理主義の乖離が広がってきた事情が窺われる。

讃岐の庄松翁

時代は下り、讃岐の庄松翁は幕末にかかる寛政二年の生まれで明治初年までの生涯である。真宗には大きな派だけでも十派あるが、庄松翁は興正寺派勝覚寺の門徒であった。讃岐国大内郡壬生村字土居の生まれで一生を独り身で通した。翁の来し方を記したのは、遙々松前藩から訪ねてきた徳太郎という同行で、後に諦順師が後編を足して『庄松ありのままの記』として今に伝わっている。藤師の評では、庄松翁は清九郎翁と並んで古今妙好人の双璧とも謂うべき、という絶賛ぶりである。

真宗教義史から、興味深い展開が見られる。翁は当初、身口意という三業において救済願求の心を表顕せねば救われぬという異安心に囚われていた。世に謂う三業惑乱である（朝枝善照師、全集第二巻）。ところが幸いにして檀那寺の弟子に周天という篤信の僧があつて、懇ろに翁を諭して正義しやうぎに立ち返らせた。これを喜んで翁は逢う度に「周天如来、周天如来」と礼拝したという。その後ある折り、とある僧が翁に三業安心の是非善悪を問うたところ、「三業どころか一業もないには困る、困る」と答えたというのである。これは翁が自分の懈怠を省みて発した詞であろうが、三業安心を痛烈に批判しているところが痛快であるという藤師の評である。

長門のお軽姫

長門国豊浦郡六連島は関門海峡に浮かぶ島で、お軽姫は享和元年にここで生を受けた。今から二百二十年ほど前である。家督を継いで養子を迎えたが、その夫が不貞に走ったことによって説法を聴聞する機縁を得たのであった。夫との間にあった蟠りもやがて氷解し、俱に連れ立って法座に通う姿が見られたという。往生の際には「なきあとに かるをたづぬる人あらば 弥陀の浄土に、、、」と辞世を詠みかけて息絶えたと伝わる。幕末の安政三年、行年五十六であった。

近江の興市翁

興市翁は椋田姓で、近江国坂田郡入江村に生を受けた。時は幕末天保十二年で、二十七年後に明治維新が始まるという時世であった。幼少の頃より求道の志厚く、二十歳頃には寺参りがし易いように兄の家を出て一人暮らしになった。所有する農地が狭かったので、一月を三分して十日は自家の畑を耕し、十日は人に傭われて賃仕事、残りの十日は仏法聴聞に明け暮れたとされる。言行録には、畑で穫れた大根を彦根や長浜の街へ売り歩いたり、入江を埋め立てて米原駅を建設する作業に従事した話が盛り込まれている。このような言行録は翁自身の筆によるものではなく、没後に近親者によって編まれた『興市話記』や手次寺住職であられた河村義雄師による刊本『是人名分陀利華——興市同行念仏抄』が遺されている。ここに、妙好人の行跡

がどのように遺されたかを知ることができる。

因幡の源左翁

因幡の源左こと足利源左衛門——源左衛門というのは土地の習慣による通り名で、本名は足利喜三郎という——は、幕末の天保十三年、気多郡山根村生まれである。家業は農業の他に楮を材料として特産因州和紙を漉いた。安政六年に父の善助が流行病で急死し、十八歳で一家の担い手となった。その三年後に村内の小林くにと妻夫になり三男二女に恵まれるも、この子ら全員に先立たれてしまう。二度の火災に遭遇したことに加えて、八反あった田畑や持山も手放すという不運に見舞われた。そのような逆境にもめげずに、門徒としての信心に支えられて妙好人という評判を得たものであろう。

源左翁は「死とは何か、親様とは誰か」という問いから始まって、生涯に亘って仏道を問い続けた。最初の問いかけにしても、優れて哲学的な趣を有していた。そういう生涯は、まさに求道者と言えるであろう。昭和五年に没したのは行年九十歳であった。没後まだ百年に至っていないのは、「今を生きた人」としておこう。

浅原才市翁

浅原才市翁は幕末の嘉永三年、石見国大浜村に生まれた。十八、九歳頃から聞法に勤めたものの、後世に遺るような自分の信心を書き留め始めたのは五十を過ぎてから、という。その頃には下駄作りを生業とし、下駄を削る際の本屑や鉋屑に思いついた事を書き留め、夜にそれを小学生用の帳面に清書するのを無上の楽しみとした、と伝えられている。日々の生業を大切に、その中で信心に喜びを戴くという、妙好人として理想的とも思える日暮らしであったものと思われる。妙好人全般について言えることであるが、今に至るまで遺されている言葉というのは文章として書いたものは和歌の形式やそれに準ずる形であり、より生前の語り口を伝えるのは話し言葉そのものである。信心の有り様を自らの言葉として発したのである。それは生活と一体になった真実の発露であると言えよう。

斎藤政二翁

最後に採り上げるのは斎藤政二翁である。大正八年生まれ、昭和五十九年没であるから、まさに現代に生きた妙好人であった。大正生まれというのは廃藩置県成って久しいが、朝枝善照和上編になる伝記にも『安芸の妙好人』という副題が付いている。当時の山県郡雄鹿原村で生まれ、八歳までに両親を亡くした。その後は叔父に後見をせられ、二十二歳で近衛歩兵一連隊に入隊した。対英米開戦前年である。五年で敗戦となった。翁の伝記には、折に触れて詠んだ短歌が伝えられている。命終える際は、先人の智慧に頼る他はないのである。その教えに照らされて、進むべき道が白く浮かび上がっている如きである。政二翁、行年は六十六であった。

以上の十人は、妙好人列伝とも言うべき書物には必ずと言えるほど採り上げられている。これは妙好人研究が代々受け継がれているという伝統とも言えるであろう。妙好人としては門徒の間では価値を認められているものの、一般的にはあまり知られていないと言えるであろう。それは即ち、信心に重きを置いて日常生活を営んでいた故に実業で名を成したり財産形成をするというような世俗的な事業については無欲であった心持ちの現れであったと考えられよう。

妙好人という評価は結果として、一人の門徒が生を終えてからその信心ぶりについて自ずと定まるものである。

ことほど左様に「このような人物を妙好人と呼ぶ」というような限定された定義があるものではないので、研究者によって採り上げ方は随意である。以下では、この十人以外に扱われている妙好人の生涯を見ていくこととする。

加賀の千代女

西山郷史師は『妙好人 千代尼』として一書を成している。加賀の千代女として知られ、「朝顔に 釣瓶取られて もらい水」が代表句として人口に膾炙している。井戸の釣瓶に朝顔の蔓が巻き付いて、水を汲むことができない・・・「やれやれ、どうしたものか、、、」という状況を詠んだ句である。自然を大切に、あるがままを楽しむという日本人の心性を詠み込んでいると言えるであろう。「夏が終わって朝顔が枯れるまで、このままにしておくのか」というような心配は無粋というものであろう。

帯の惹句には「徳富蘇峰氏に、西行法師に匹敵する俳人と評された」と紹介されている。西行法師の時代に俳句はなかったのであるから、随分と乱暴な括り方ではあるが、千代女の価値をそれだけ評価しようという意図は伝わる。

千代女の生まれは元禄十六年、赤穂事件の二年後であった。北国街道の松任宿は門徒が多い地であった。

千代女詠としてよく知られた句で

蜻蛉釣り けふはどこまで 行ったやら

が伝えられている。一茶翁の引用では下五は「行た事か」とされている。この句を詠んだ背景には、悲しい事情があった。千代女の息子であった弥市を失った悲しみが織り込まれているのである。これが我が子の元気な成長を喜んでいるのであれば、平凡ながら親としての幸福に満ちあふれている様を想像することができる。しかし親として我が子に先立たれるというのは、愛別離苦の中でもこれ以上はないという哀切の極みであろう。そのような背景を織り込んで味わうと、老少不定という教えが身近に感じられる。今は亡き我が子が蜻蛉釣りに夢中になって日が暮れを過ぎてても帰ってこないのを心配していた当時の回想か、はたまた近所の子供がまさに蜻蛉釣りに熱中しているのを詠んだものか・・・この句も、多様な読み方ができるという点で人の心を惹きつけるものであろう。

同じように幼い我が子に先立たれた一茶翁の句には

露の世は 露の世ながら さりながら

とある。我が子の儚い命を露に譬えており、表現としては分かりやすい。意味論的に分析すると、「露は露である」という同語反復であって何も言っていないのに等しい。下五の「さりながら」が、「そうではあっても、、、」というので余韻を生み出しているのである。「露の世ながら さりながら」という繰り返しも味わいが深い。人の親として哀切きわまりない、子に先立たれるという思いを籠めている。このように俳句というのは、日本文学が生み出した僅か十七音のうちに遙かな広がりを持つ世界観を封じ込める工夫が成されていると言える。

子を失った哀しみを詠んだ句に

破る子の なくて障子の 寒さかな

も遺されている。これは蜻蛉釣りよりも直截的で、元気で居れば家中の障子を破り回って、そ

それはそれで後始末をせねばならぬが、それが無い寂しさをありのままに言葉にしてある。子の成長はあっという間で、手がかかる頃の大儀さは後で思い返すと懐かしいものである。しかし子が無事に成人になって思い返すのと、何十年を経て偲ぶのとでは天地ほどの開きがある。

千代女は、このような経験から剃髪して出家を成し遂げた。法名を尼素園と号した。六十二歳の折に、五百四十六句を収載した『千代尼句集』を上梓した。以降、『俳諧松の声』（三百三十六句収載）、『自選俳句集』（七十六句収載）と続いた。俳人として、充実した人生であったと言えるであろう。安永四年、行年七十三で没した。

一茶翁

上述のように、一茶翁は千代女の俳跡を慕い続けた。我が子に先立たれるという境遇も共通であり、他人事と思えなかったのであろう。千代女より五十年ほど後、宝暦十三年五月五日に信濃国柏原で生を受けた。手次寺は本願寺派の明専寺であった。三歳で実母を失い、八歳で継母を迎えた。その折に

われと来て 遊べや親の ない雀

と詠まれた。幼心に、実母を亡くした心境が痛々しい。これは翁の生涯を通じて一貫していたのであろうし、ご自身も幼い我が子に先立たれるという逆縁に遭われた。人の縁としても、これほど重なる不幸はいかばかりかと悼まれる思いである。このような巡り合わせの中で信心がどれほど支えになるのか、考えてみなければならないであろう。人が人として生まれてきて、四苦八苦は避けて通ることができない試練である。そうとしても、三歳で実母と死別し、我が子にも幼くして先立たれるという不縁は「何故にこのような苦しみに耐えねばならぬのか」と考えるのが自然と言えるほどであろう。そのような実体験が句作として後世に残されたと味わうべきであろう。

撫子や 地藏菩薩の あとさきに

この句にも、そのような心情が滲み出ている。ただただ両手を合掌してお称名を唱えるしか、その心情を偲ぶことはできないであろう。医療が進歩して救われる命が増え、結果として平均余命は八十歳代半ばまで延びてきた。特に出産直後から幼少時までの医療体制が整うことによって、幼い命が守られてくるようになったのが、長寿化の恩恵である。逆に考えると、近代医療が普及するまでの時代は、命は常に危険に晒されていたのである。ちょっとした病が命取りになった。抵抗力がない幼児や高齢者は、頼る術がなかった。

自身が幼くして親を亡くしたことが関わったのか、初婚は五十二歳の折で、相手は「きく」という名で二十八歳の娘であった。生国の越後は雪深い地であった。

これがまあ 終の棲家か 雪五尺

という句が遺っている。小動物に対する眼差しは、生来の孤独感を映していたものであろうか。

雀の子 そこのけそこのけ お馬が通る

やせ蛙 負けるな一茶 是にあり

子雀に対しては、「お馬が通るから、踏みつぶされないように」という心遣いが窺える。二句目は蛙同士が相撲を取っている場面であろう。見るからに体格で劣る方を応援しているという心意気を読み取れる。実生活の面では一茶翁はこのように一般人が気付かないような小動物に気配りをする反面で、農作業など実利に繋がるところには全く興味がなかったのであろう。「浮き世離れ」した作俳人生であったと言える。

最晩年の句には、お浄土へのお迎えを意識したかのような心境が覗かれる。

ともかくも あなたまかせの 歳の暮れ
ぽっくりと 死が上手な 佛哉
御仏は さびしき盆と おぼすらん
御仏や 寝てござっても 花と銭

一句目、「あなた任せ」とは阿弥陀如来のお力にお頼りして極楽往生を願う心情であろう。他力本願という真宗の心得を端的に示している。今と異なり、米にしても味噌にしても醤油にしても掛け売りが基本で、歳の暮れに取り立てが集中した。それは上方噺『掛け取り』などでも、長屋の住人が店の掛け取りとの駆け引きで支払いを待って貰おうという苦労が活写されている。現実世界としては、そこまで想像したくなる場所である。他方で精神世界からどう読み取ることができるかと考えてみると、一年を振り返って「ああ、あんな事もあった、こんな事もあった」と思い出している場面もあり得るであろう。両様に読むことができる辺りが俳句鑑賞の長所である。

二句目は、自分自身も苦しむことなくぽっくりとお浄土にお詣りしたいという願望が宿っているように思われる。ここで言う「佛様」は亡くなった遺人を指すのであろう。長患いもせず、周囲に迷惑をかけることなく往生を成し遂げたことを羨み「自分もそうありたい」という願いが込められているように思う。

三句目と四句目は、厳しい現世とは異なる苦のない極楽への憧憬とも読めるような印象である。私生活では晩婚で、子に先立たれるという不縁にも見舞われたが、それを含めて現世の定めとして受け入れざるを得ないという心境に達したのであろうか。門徒として、また妙好人としての生涯を全うされたものと受け止めておきたい。文政十年十一月十九日に往生の本懷を遂げられた。行年六十五であった。

良寛和尚

次に採り上げる良寛和尚も、妙好人としてのみならず出家者として世間によく名を知られている。生まれは宝暦八年で、一茶翁より五歳年長である。越後国出雲崎という地は日本海に近い。冬は豪雪で出歩くことも不自由であったろう。越後と信州は隣り合う地であり、一茶翁と良寛和尚には共通点が多い。

生家は出雲崎の庄屋である山本家という家柄であった。俗名は栄蔵であったが、十八歳の折に曹洞宗の光照寺で出家した。庄屋を継ぐ必要がなかったので出家したものであろうか。父母との関係は入り組んでおり、弟に家督を譲ったのもその事情が絡んでいたようである。二十二歳の折に、良寛という出家名の名付け親である備中円通寺の十世であられた大忍国仙師に従って備前に旅立った。それ以来、十七年の永きに及んで国仙師の下で修行を積んだ。師の隠居後も数年は円通寺に留まったが、示寂後は諸国を経て越後に帰った。越後には帰ったものの出雲崎ではなく国上山の中腹に五合庵という庵を結んで居を定めた。庵での暮らしは清貧そのもので、禅の教えを実践するが如くであった。

良寛和尚は漢詩も作り、多くが今に伝えられている。五言絶句を一首、引用しておく。

西方安楽国 南無弥陀仏 一念又一念 往生何所疑

結句のみ「往生、なに疑うところぞ」と読み下す以外は、そのまま読める。助詞の追加も必要ない。無為無体物の境地である。但し、通常の五言絶句として韻は踏んでいない。技法と

しては何ら難しい工夫はなく、そのままに読んでずっと頭の中に入ってくるような造作になっている。これも和尚の人柄を表象していると言えようか。

しかし和尚の信心ぶりをよく伝えているのは、次に挙げる和歌の類である。藤氏『妙好人列伝』から引用する。

み佛の しろしめしつる 古を 今にうつして 見るがたふとさ
世の中に 何が苦しと 人間はゞ みのりを知らぬ 人と答へよ
水の上に かずかくよりも はかなきは み法をはかる 人にぞありける
かにかくに 物な思ひそ 弥陀仏の 元の誓ひに あふとおもへば
八ちまたに ものなおもひそ 弥陀仏の もとの誓ひの あるにまかせて
不可思議の 弥陀の誓ひの なかりせば 何をこの世の 思出にせむ
我ながら うれしくもあるが 弥陀仏の います御^{みくに}国へ ゆくとおもへば
またれにし 身にしありせば 今よりは かにもかくにも 弥陀のまにまに
おろかなる 身こそなかなか うれしけれ 弥陀の誓ひに あふと思へば
極楽に わがち、は、は おはすらむ 今日ひざもとへ ゆくとおもへば
良寛に 辞世あるかと 人とはば 南無阿弥陀仏と いふとこたへよ
くさのいほに 寝てもさめても 申すこと 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏
こゝろもよ ことばも遠く とゞかねば はしなく御名を 唱へこそすれ

全般に、漢字が少なく仮名が多い表記である。

一首目は抽象的な趣である。「いにしへ」というのは、原始仏教を想起させる言葉遣いである。恰も釈尊が二千年來の往時に唱えられた元々のみ教えを今の世に実践せんとするかの如き意気込みである。

二首目「みのり」は「御法」であろう。このような場合は漢字で書いた方が理解が早い。憂き世で仏法を知らぬ人が、何が苦しいかと問うている。御法を知らぬ者が最も苦しい、そのことを悟れ、という意である。三首目は「み法」という書き方になっている。「水の上に数を書く」と言うのであろうか、これは些か真意を量りかねる。水面上に数字を書いてみる、というのであれば確かに覚束ない動作である。これを人の世に仏法を求めるといふ術に譬えているのであろうか。そうであるとしても、良寛和尚の求道法は掴み所がない。やはり禪宗特有の自力専修で、自らを責めて悟りを求めるという方向性であるように思われる。何を求めれば悟りに至るのか、自分で考えなさいと突き放されているように感じるのは阿弥陀如来にお縋りするという心性が身に染みついているものであろうか。

しかしながら四首目で「かにかくに ものなおもひそ」というのは、「あれこれと余計なことを考えずとも良い、阿弥陀如来のお力にお任せすれば良いのであるから」というように受け取ることができよう。「阿弥陀如来の誓願にお任せする」という意は、真宗で「無量寿經」第十八願に重きを置くという考えに通ずる。十八願は、どのように深重な罪を背負う者であっても必ず救い取るぞよ、極楽浄土に導くと仰せられている。ただ一心に南無阿弥陀仏と唱えよ、他念あるべからず、と説かれてある。それは五首目で「八ちまたに ものなおもひそ」に通じている。世事は四方八方に広がって際限がないが、それは憂き世の泡沫である、瑣事を放念するという境地を得ることなしには求道はままならぬ、という心得である。凡人は世間との繋がり^{うたかた}を断ち切るには、大きな覚悟が必要である。それができてこそ、真の出家成道が成し遂げられるのである。

六首目は、いよいよ極楽往生が近づいている心境を詠んだものであろうか。「うれしくもある」は「うれしくある」に比べて、「も」一字があることによって恐怖の念も併存していると思われる。往生は本懐を遂げるのであるから喜ばしいことであるが、他方でこの世とお別れせねばならぬ。加齢と共に体に不調を来したり病の床に伏せることも、臨終への恐怖を募らせることであろう。周囲の者との離別もある。これらを乗り越えて悟りを開くというのは、出家の身と雖も難しいであろう。

七首目「またれにし」は阿弥陀如来がお浄土で待ち受けていることを受け身形で詠み込んだものであろう。ここでも「かにかくに」を繰り返している。あまり深刻な意味合いがないだけに、用いるのに便利であると言えよう。「今よりも」は「これからは」という意で捉えておく。全体を現代語訳すれば「阿弥陀如来に待ち受けられる身であるから、これからは如来の意のままに生きていこう」というように解されよう。

八首目は自分を愚かと卑下し、なおかつそれを喜ぼうとしている。「なかなか」という副詞は、どの程度を指しているのか漠然としているので曲者である。仮にこれを「本底」とすれば、真情が籠もることであろう。どこまで自分の真情を盛り込んでいるのやら曖昧模糊とした「なかなか」では、踏み込みが足りない。

九首目は、見送った父母を偲ぶ気持ちが切ない。長寿化が進んだ今でこそ、男女ともに平均余命は八十歳代で曾孫の世代を抱くことが普通になってきている。しかし三百年前では「人生五十年」と言われ、孫の顔を見ることさえ望みがままならぬという短命の時代であった。自分も年を取ると共に父母へ追慕の念が募っていくという心情を読み取ることができる。そのような時代にあつては「人生七十年、古来稀なり」であった。良寛和尚は十分に天寿を全うしたと言えよう。そうしてそういう長寿の余録として最晩年までの句作が後世に伝えられているという事実がある。

十首目で辞世に言及しているが、実際には後でみる一首を遺すことになる。禅僧として出家しながら、墓は浄土真宗の隆泉寺に建てられた。曹洞宗も真宗も南無阿弥陀仏を唱えるという点では共通している。和尚晩年の信心が曹洞宗と真宗のどちらに向けられていたのか、もっと探してみたいところである。ここだけの解釈に集中するとすれば、専修念仏という結論を得ることもできそうである。

十一首目で「草の庵」というように我が暮らしに言及している。想像してみると、好んで暮らしているとは言うものの修行の一環として清貧に堪え忍ぶという趣を徹底する必要があつたであろう。夏は暑く、冬は厳しい。食べるものとて、空腹を満たすか満たさないかというような具合で、山海の珍味とは縁遠い食卓であろう。心底このような暮らしを楽しんでいたものか、あるいは何かの都合で普通の暮らしに戻りたいという願いがあつたものか——史実がその答えを教えてくれているようである。五十九歳の折に山を下りて、麓の鎮守に小庵を結んで移った。更にその十年後には、島崎村の木村元右衛門が勧めて裏庭に小亭を建ててそこに入ったという。やはり人里離れた山中で隠遁生活を送るというのは一つの理想であつて、現実には厳しかったと見える。

最後の詠はやや読み辛い。「心も言葉も届かない」というのは意味深長である。孤独で、周囲には心置きなく話せる相手も居なかったことを嘆いているのであろうか。それ故にお称名を唱えて心を無にするように努める——というのでは、悟りとは隔たりがあるように思われる。「はしなく」は『広辞苑』の見出しでは「はしなくも」という語形で「これといったきっかけ

なく、思いがけず、はからずも」という語釈がある。周囲を見回しても誰も居ない、言葉をかける相手とて見当たらない、自分で好んで選んだ境涯とは言うものの、御名を唱えるしかないか、、、そのような暮らしぶりが偲ばれる。

最後に、辞世を見ておきたい。

かたみとて 何残すらむ 春は花 夏ほとゝぎす 秋はもみぢば

四季を詠み込んで、花鳥風月に遊ぶ境地である。行年七十四、もう十分に人生を楽しんだ、花鳥風木の美しさも堪能した、思い残すことはない、形見もないぞよ、という遺言であるように味わってみたい。天保六年正月六日の夕べであったという。春の花は桜であろうか。四季の美しさを詠み込むということは、現世への心残りを反映しているとも考えられる。人の子であるからには、現世に心残りがあって当然である。「形見に残す物はないが、この世を去るについては後ろ髪を引かれる思いである」という率直な真情の吐露である。辞世を見る限りからは信心の世界を離れているようでもあるが、それまでの歌作は阿弥陀如来のお力にお頼りして極楽往生を遂げるといふ思いを託していたのであった。

第三節 妙好人伝の系譜

前節後半で採り上げた三人は、一般的な定義での妙好人には当て嵌まらないと考えられる。即ち、妙好人とは市井の篤信者であり無名であることを前提とする。その点、千代女にしても一茶翁にしても良寛和尚にしても、文人として名を成している。そして俳句や歌作で著作も遺されている。専ら俳句や歌作が本業であり、信心はその背景にあったと考える方が常識的であろう。しかしながら、その本業と信心が分かち難く一本の糸で結びつけられているという点も心得ておかねばならない。

真宗特有と思われる信心のあり方として妙好人について一書となった例は多い。伊藤智誠師『妙好人めぐりの旅』、菊藤明道師『鈴木大拙の妙好人研究』、白川晴顕師『妙好人のことは』、鈴木大拙居士『妙好人』、直林不退師『妙好人 日暮しの中にほとばしる真実』、西山郷史師『妙好人 千代尼』と、真宗関連出版物においても質量共に一つの中心を成すと言えるほどの分野であると言える。

同時代の妙好人について興味を持ち、その言行を記録に残そうとする試みは、いつの時代に始まったものであろうか。

妙好人列伝は仰誓和上以来、篤信門徒の記録が脈々と伝えられているのであるが、その妙好人伝を編んだ側の歴史を辿ってみるのも大きな意義が見出されることであろう。大和の清九郎翁に会うために伊賀上野から吉野まで出掛けた仰誓和上のように、妙好人と出会うことによって、その生き方を書物に残そうという気持ちが自ずと生じてきたものであろう。そのような同時代的重なりというのは貴重である。また同時代人でなくとも、時を経てなお語り継がれる程の篤信ぶりは、積み重なれば歴史となるほどの重みを成すのである。

藤師は『妙好人列伝』仰誓和上の章で、妙好人伝の濫觴を平安中期である長保四年、慶滋保胤著の『日本往生極楽記』に求めておられる。その続編として約百年後に大江匡房卿（長久二年生、天永二年没）著の『続本朝往生伝』が編まれた。時代的に、これら往生伝は真宗立宗以前であるから、諸宗派に及んでいた。「妙好人伝」と銘打ったのは仰誓和上が初であり、和上

の二十五回忌を期して法嗣である履善師が校正を施して上下二巻として上梓したのが文政元年であった（朝枝善照師、全集第三巻による）。仰誓和上のご生誕からは百年近く、清九郎翁との対面からでも七十年が過ぎていた。

本稿で生涯を追うた妙好人十三人のうちでは、道宗翁が蓮如上人と同時代と特段に古いのである。翁は上人のお側に仕えていたこともあり、『蓮如上人御一代記聞書』にその言行が伝えられている。妙好人と限定せずに、篤信の在家信者として今にまで伝わっているのは稀有なことである。以下では、仰誓和上以降を項立てしていく。

仰誓和上と玉譚和上

直林師は、仰誓和上をもって妙好人伝編纂の嚆矢とされている。和上は今から約三百年前の享保六年に京は高辻西洞院に生を受け、数え九歳で父の寂便師が住する本願寺派明覚寺に入った。剃髪時の名は祇円という。寂便師は蓮如上人九世の末裔であったという。父子共に伊賀上野に移った後に祇円師は名を仰誓と改め、『三帖和讃触象記』を著した。ご本山からは実成院という院号を賜った。和上が清九郎翁と対面したのは翁の最晩年であったが、和上は数えの三十歳という若さであった。和上は「世間ノ人ハ、吉野ノ花ヲ詠メントテ、ハル／＼至ル人ハ多ケレトモ、我々ハイカナル仏祖ノ御引合ニヤ、信者ノ花盛りヲヨメントテ、吉野ノ奥ニ下リシハ、マコトニ不可思議ノ因縁ナリ」と記しておられる。

また藤師の伝えるところによれば、仰誓和上は「予も二三の同行をうちつれ今茲寛延二年の春二月に彼地にいたり、清九郎に対面して、住家のわびしきありさまもまのあたり見侍りぬ」、「かほど目出度信者に今まで値遇せざりしは浅猿しきこと」とある。丹生谷の住まいは僅か二間ほどの藁葺き小屋を山の脇に建て、家の中は筵が二枚か三枚、道具と言えば釜一つ茶碗二つ三つしかなかったという。

和尚は大和の清九郎翁と同時代に生き、妙好人としての生き方を記録に留めた仰誓和上をもまた妙好人であると翼賛する考えがはっきりと示されている。純なる信心を持つ者同士は、一言二言交わただけでお互いに通ずるものがあるであろう。篤信の人と出会い、その信心に感ずるところあって、その生き方を後世に伝えたいという思いがまた自らをその境地に高めていったものであろう。その伝で考えれば、藤師もまた妙好人の一人に列せられて然るべきであろう。

菅真義師

石州学派の流れを汲む、本願寺派光現寺に大正十一年に入寺した菅真義師は明治十二年の生まれであった。善太郎翁の住まいに近く、翁は光現寺に聴聞に通っていたのであった。翁は筆まめで手紙などもよく書いたが、筆跡が独特で判読が難しかったという。そこで真義師が資料を纏めて『分陀利華』など刊本にした。

才市翁伝に連なる系譜

前節では直林師の妙好人伝に倣い、十三人の列伝とした。その中でも、才市翁は必ずと言えるほど妙好人伝には欠かせぬ存在であって必ずその一人に数えられていた。妙好人伝の数だけ才市翁伝が遺されていると言える。それだけに、翁の生涯をどう捉えるかもまた趣が異なることであろう。年代順に追ってみたい。

朝枝善照師

妙好人研究で最も体系的に遺されているのは、朝枝善照師の全集三巻本であろう。ここには、真宗研究の分野として妙好人が一つの重きを成すということをしめしているものである。

さて本筋を才市翁研究に戻すと、やはり石州学派に所縁があることを再認識するのである。朝枝善照和上は昭和十九年のお生まれで、石州浄泉寺の血脈に連なる。著作集が全五巻に編まれているが、そのうち第二巻と第三巻が妙好人基礎研究として組まれている。以下に、この二巻目次を採録してみる。

序論 『妙好人伝』 研究史

第一章 初篇『妙好人伝』の特色

第二章 『妙好人伝』の成立過程

第三章 編者仰誓の『自警』

第四章 石州学派と『妙好人伝』

第五章 石州学派と『高城家儀』

第六章 『親聞妙好人伝』と『妙好人伝』の関係

第七章 履善師とその周辺

第八章 石州学派と伝道

第九章 『遊方日記』にみられる石州浄泉寺の動向

結語

こうして全体の目次に目を通してみると、和上がどのように妙好人論を体系化されていったかを辿ることが出来る。本文には才市翁という見出しはないが、附録には才市翁から伝えられた帳面の書き付けを活字化して翻刻している。和上に至って、真宗の妙好人研究は一つの頂点に達したとも言えようか。仰誓和上に始まって、三百年近く弛みなく妙好人という生き方を追いつけてきたのである。しかもそれは孤立した巨峰ではなく、周囲には数えきれぬほどの峰々が連なっている。

そして、善照和上の法統を嗣がれたのが直林師である。数ある妙好人伝で、『日暮の中にほとばしる真実』という副題が付いた著書は、入門的位置付けとして最適であった。最大の特徴としては、幅広い真宗史の視点から妙好人の実践が教義とどのように関わってきたかを明らかにした点であると筆者は考えている。そして一人一人の生き方が親しみやすく伝えられている。その筆致によって、妙好人は如何にも身近に居る人として感ぜられるのである。それは即ち、門徒であれば誰もが妙好人たり得る存在であるということを語っているように思われる。これこそが、真宗における信心の在り方として柱となる心得であると言えるのではないだろうか。

直林不退師

直林不退師は朝枝師の薫陶を受け、妙好人研究の衣鉢を継いだ。その成果は『妙好人 日暮しのの中にほとばしる真実』という著となって結実したのである。師はまた、真宗独特の説教法である節談にも造詣が深い。節談説教は、セリ弁と呼ばれる五七調の名文句を結び近くに置く、古風な布教法であった。「前近代的」として一時は滅びかけたが、見直されて今では各地で大会が開かれるまでになった。その立役者が直林師である。節談は高座という高さ半丈ほどの台

に上がり、道具は中啓以外を用いず話術だけで聴かせようとするものである。話術として、太平記読みが講談になり、面白い噺を聞かせるのが落とし噺になったという歴史を辿ると、説教は話芸の源流であると言える。筋が山場に差し掛かると、満堂の聴衆が応えて「受け念仏」として六字名号を唱和する。このようにして、節談という説教の形は独自の発展を遂げた。元和から寛永年間にかけて安楽庵策伝和尚が『醒睡笑』を編んだのも、説教のネタ本として面白い噺を集めたのが下敷きになっていたのである。

第四節 結び

この小論では妙好人研究の系譜を辿ってきたが、通して概観してみると妙好人その人、あるいは研究者は皆ご本山と本学に連なっていることを実感できた。但しお東さんと大谷大学にも同じように伝統が受け継がれている点には注意が必要である。

第三節では妙好人伝を編んだ和上の足跡を追うたが、これも妙好人研究には欠かせぬ視点という意図で立論したものである。清九郎翁には仰誓和上、才市翁には慧達師と、妙好人を見出して「世に出した」後ろ楯があったのである。今では、説法を聴聞して妙好人が育ち、それがまた説法の譬喩因縁に取り込まれる、という循環ができているのではないであろうか。妙好人の言行録には、説法で聴聞した中身や文言が残っていたという例も近江の興市翁と真了師の間で見られた通りである。

妙好人という生き方に惹かれるのは、信心の発露そのものである。それ故に、妙好人の行跡を伝える事によって、書き手もまた同化していくというような経緯を辿ると言えるのではないだろうか。

本論で採り上げた妙好人伝を分類すると、何人かを総合して列伝体にした著と、一人だけに集中した伝記体とに二分することができる。西山郷史氏の『千代尼』は後者の例である。句作と信心の跡を深く掘り下げている。それに対して列伝体は、時代も背景も異なる何人かを比べることになる。それによって、多様な妙好人像を立体的に捉えることができるようになる。庄松翁のように、御門主の袖を引いて「兄貴、覚悟はできているか」と尋ねるような豪快な人物もあれば、備後の常女のように念仏の内にひっそりと生涯を終えた例もある（藤師『妙好人列伝』）。十人十色である。一人一人の生き方が多様であることによって、現代人の信心もまた各人それなりの心得を持つことができるであろう。

また、列伝の中には西行法師や解脱上人、僧丈草、僧廓三というような出家者も含まれている。一般的に「妙好人」というのは篤信の在家信者であると定義されるが、これは出家者を排除しなければならないという理屈にはならないであろう。出家者の本分というのは衆生を導くということであるから、その前提として自分の行いは常に正しくなければならぬという前提が考えられる。西行法師は武士の身を捨てて法門に入り、一生を花鳥諷詠で終えられたことで知られる。列伝で法師を巻頭に置かれた藤師は、その生涯全体を妙好人として味わわれたことであろう。在家であろうとも出家であろうとも、私心を捨てて信心に邁進する姿が他人の心を打つのである。

更に妙好人を類型化するとすれば、周囲の印象に残るような奇特な言行をする場合と、平凡なように見えても一日に何万遍もお念仏を唱えるというような積み重ねをする場合に分けられよう。列伝に遺るような妙好人像としては、前者の方が多いであろう。そして前者の場合、庄

松翁のように周囲がはらはらするような突飛な言行もあり得る。六連島のお軽唄も、漁師が舟を出さないような時化た日にも小舟を漕いでお聴聞に通い、周囲をはらはらさせた。逆に三河のお園唄は、常に名言で周囲を納得させた。

このように真宗には、妙好人という生き方を脈々と伝えてきた伝統があった。そこから浮かび上がるのは、日々の暮らしに感謝しながら朝な夕なに掌を合わせてお六字名号を唱えるという基本的な暮らし方である。誰もがそのお名号から入り、無心に阿弥陀如来との対話を試みているのである。真宗には戒律がないと言われるのは、自らが信心を通じて生き方を律していくという考えが根本に据えられているからであろう。

最後に、節談のセリ弁風に一節を留めておく（創作であり、「悪人正機説」を下敷きにしてある）。筆者がこれまでお聴聞を重ねて、耳に残っている言葉を連ねてみたまでであるが、妙好人の心持ちとはこのような境地であろうかと想像してみる機縁にしてみたい。

善人なおもて往生を遂ぐ 況んや悪人をや
然るを世の人 常に曰く
悪人なおもて往生を遂ぐ 況んや善人をや
開山ご聖人、親様は誰でも必ず救うと仰せられた
どのような悪人でも救うぞよ
極楽浄土に渡すぞよ
遠慮は要らぬ 身体一つで舟に乗れ
只ひたすらに念仏せよ、
拝み上げては南無阿弥陀仏
唱え上げては南無阿弥陀仏

参考文献

- 朝枝善照（2016）『妙好人伝基礎研究 正統編』京都：永田文昌堂。
安藤礼二（2018）『大拙』東京：講談社。
安藤礼二（2019）『列島祝祭論』東京：作品社。
石井公成（2017）『〈ものまね〉の歴史 仏教・笑い・芸能』東京：吉川弘文館。
伊藤智誠（2018）『妙好人めぐりの旅』京都：法蔵館。
角岡賢一（2020）「信仰と芸能という側面から見た説教」『節談説教』、節談説教研究会。
角岡賢一（2025）「妙好人という生き方」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第33号 17-49頁。
菊藤明道（2017）『鈴木大拙の妙好人研究』京都：法蔵館。
釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。
白川晴顕（2015）『妙好人のことば——信心とその利益——』京都：本願寺出版社。
鈴木大拙（1976）『妙好人』京都：法蔵館。
鈴木大拙（2010）『日本的霊性 完全版』東京：角川ソフィア文庫。
関山和夫（1990）『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。
関山和夫（1991）『落語風俗帳』東京：白水社。
関山和夫（1992）『落語名人伝』東京：白水社。
関山和夫（2001）『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。

- 谷口幸璽（2004）『「節談」はよみがえる』京都：白馬社。
- 直林不退（2010）「説教の歴史と節談」『節談説教』第五号。
- 直林不退（2014）『名人木村微量の承継者 神田唯憲の節談』八王子：節談説教研究会。
- 直林不退（2019）『妙好人 日暮しの中にとぼしる真実』東京：佼成出版社。
- 西山郷史（2018）『妙好人 千代尼』京都：法蔵館。
- 府越義博（2010）「説教台本作成法」『節談説教』第六号、37～49頁。
- 藤秀璿（2013）『新撰 妙好人列伝』京都：法蔵館。

龍谷大学留学生別科の沿革 —1985 年の設置から 2026 年の廃止に至るまで—

The History of Ryukoku University's Japanese Culture and Language Program (JCLP) for International Students: From Its Establishment in 1985 to Its Closure in 2026

三 原 龍 志
MIHARA Ryushi

キーワード

【留学生別科】 Japanese Culture and Language Program

【非正規課程】 non-degree program

【カリキュラム改革】 curriculum restructuring

【CEFR】 Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment

【難民・避難民学生】 refugee and displaced students

I. はじめに

龍谷大学留学生別科は、1985 年に設置され、以来約 40 年にわたり、本学における私費留学生の受け入れおよび日本語教育の一端を担ってきたが、2026 年 3 月末をもって廃止されることとなった。

本稿の目的は、留学生別科の設置に至る経緯から廃止までの過程を制度、教育実践、運営体制の変遷に即して記録として整理することであり、本学における私費留学生を対象とした日本語教育予備課程がどのように構想され、どのように運営され、社会状況や大学の方針の変化に応じて再編されてきたかを客観的に示すことである。

留学生別科は、大学に設置された非正規課程であり、学位取得を目的とする学部・大学院課程とは異なる教育課程である。一方で、主に大学進学を希望する私費留学生に対して、日本語運用能力の向上、日本社会・文化の理解の促進、日本語及び日本社会文化の知識の習得等を通じて大学進学支援を担ってきた点に特徴がある。したがって、留学生別科の歴史を整理することは、単にその沿革を記録するに止まらず、本学の日本語教育および留学生受け入れの変遷を確認する上でも意義を有すると考える。

なお、本稿の前半期の沿革整理にあたっては、「龍谷大学国際センター交流史」『龍谷大学国際センター研究年報』（龍谷大学国際センター、1996）および『留学生別科 20 年の歩み』（龍谷大学留学生別科、2005）を基礎資料とした。

Ⅱ．留学生別科設置の背景

1. 制度的背景と設立の経緯

本章では、まず、留学生別科に関する法的規定について確認する。昭和 22 年法律第 26 号である「学校教育法」（令和 7 年 10 月 7 日施行）第九章「大学」第 92 条第 3 項において、「大学の別科は、前条第 1 項に規定する入学資格を有する者に対して、簡易な程度において特別の技能教育を施すことを目的とし、その修業年限は 1 年以上とする」と定められている。

ただし、同条においては、日本語予備教育を実施する課程としての性格については明示されていない。すなわち、留学生別科を日本語教育課程として位置づける直接的な法的根拠が明確に示されているわけではない。その意味で、留学生別科は大学における「別科」という制度的枠組みを用いながら、各大学の留学生受け入れ方針や教育目的に応じて、日本語予備教育を担う課程として設置されてきたといえる。

1980 年代の日本は、経済大国として国際的地位を高める一方で、教育・文化面における国際貢献が求められる時期であった。1979 年にはアメリカの社会学者エズラ・ヴォーゲルによる *Japan as Number One* が刊行され、日本の高度経済成長や社会システムが国際的に注目された。また、1983 年に中曽根康弘首相（当時）の指示により設けられた「二十一世紀への留学生政策懇談会」が当時のフランス並みの留学生 10 万人受け入れを提言し、翌 1984 年、21 世紀初頭に向けた長期的な留学生政策の指針が取りまとめられた。その過程において、日本語予備教育を担う枠組みとして留学生別科が非正規課程として比較的柔軟に設置されるようになったと考えられる。

本学においても、1970 年代後半から国際交流体制の整備が進められていた。1977 年には「国際交流委員会規程」が制定され、翌 1978 年には、「龍谷大学外国人留学生規程」および「龍谷大学学生外国留学規程」制定が制定されている。1979 年には、カルガリ大学との学生交換協定が締結され、国際交流の制度面での基盤が形成されていった。さらに、1981 年には、「国際交流について、龍谷大学の海外拠点確保とその利用について、研究者の交換と研究機関の選定について、留学生の受け入れ日本語教育について」と題する第 2 次答申が示され、留学生受け入れと日本語教育の必要性が学内で明確に意識されるようになった。

1983 年には、「日本語教室講師規程」が制定され、日本語教室講師として芥川昭寿氏が日本語教育を担う講師として着任している。翌 1984 年には「国際交流に関する委員会並びに事務体制について」の答申が出されるとともに、「龍谷大学留学生別科規程」および「龍谷大学留学生別科長規程」が制定された。そして、1985 年に「留学生別科」が開講し「外国人留学生の履修特例に関する規程」「留学生別科の授業担当者決定手続きに関する規程」が制定されるなど本学における私費留学生受け入れのための日本語教育課程が本格的に開始した。

その後、1987 年には、「龍谷会館運営取扱要項」が作成、「龍谷会館管理運営細則」が制定され、龍谷会館の受け入れが開始された。翌 1988 年には、国際センター国際課（その後、国際センター国際部を経てグローバル教育推進センター事務部に至る）が発足した。さらに 1989 年には国際交流の基本施策および日本語専任教員の採用に関する上申が行われ、1990 年には留学生別科入試体制が開始された。これらの経緯から、留学生別科の設置は、単独の教育課程の開設にとどまらず、本学における国際交流体制の整備と連動したものであったことが窺える。1991 年には「龍谷大学国際センター年報」が創刊され、法学部所属の稲垣宏明氏（1991 ～

2018)、次いで経済学部所属の永保澄雄氏（1993～1998）、経営学部所属特任教授西原純子氏（1996～2002）、永保氏の後任の田尻英三氏（1998～2015）、西原氏の後任の北川逸子氏（2002～2014）諸氏が留学生別科のコーディネータおよび日本語担当として着任し、留学生別科の運営が本格化していった。また、留学生別科から本学学部への推薦入学試験制度も2004年度から開始し、2005年度は全学部に拡大していった。

2. 留学生別科の概要

留学生別科は、1年間の課程として設置され、4月入学および9月入学のセメスター制を採用してきた。定員は40名で、各期20名を原則としていた。クラス編成は、設置当初は3クラス編成で行なわれていたが、学生数の増加に伴い、クラス数も次第に増え後半は、時期によって7クラス編成が採られていた。進路は、就職希望者も混在していたが、数は少なく大学・大学院進学希望者が多数を占めていた。

詳細は後述するが、クラス編成にあたっては、出願書類審査を経て入学を許可された者に対してプレイスメントテストが実施された。2014年度までは、日本語能力試験の出題範囲に相当する筆記試験と一部面接を中心に行われ、学生の試験結果とクラスサイズ、別科生か受け入れ交換留学生（以下、交換留学生）であるかを考慮してクラス編成が行われていた。

開講科目は、大きく「日本語科目」「特別講義」「日本事情科目」に区分される。「日本語科目」は、主として大学・大学院での学修や研究に対応できる日本語運用能力の育成を目的とし、「視聴解」「読解」「文法」「総合」「口頭表現」「やりとり」「文章表現」等の日本語技能別のクラスと「ホームルーム」等が開講された。「特別講義」では、「日本語能力試験対策」「漢字」「日本文化入門」など特定の学習目的に応じた科目が設けられた。また、「日本事情科目」は、「日本の宗教」「日本の歴史・文学」「日本の経済・経営」「日本の科学技術」等、日本の社会や文化に関する基礎的知識を扱う科目が開講され、学部専門課程の教員が担当した。

なお、「日本語科目」1単位～4単位、「特別講義」講義科目は2単位、演習科目は1単位、日本事情科目は2単位で開講され、修了条件は、「日本語科目」24単位を含む32単位を履修することであった。

さらに、通常の授業に加え、各学期に1回、フィールドトリップが実施された。これは、日本の社会・文化を体験的に学ぶとともに、留学生別科内のクラス間や別科生と交換留学生の別を越えた学生間交流を促す機会として位置付けられていた。訪問先は、神社仏閣をはじめ「京都市民防災センター」「国立民族学博物館」「漢字ミュージアム」「京都四條南座体験教室」等多岐にわたった。新型コロナウイルス感染症の影響を受けた2021年度には、一時中断されたが、それ以外の年度においては、留学生別科の教育活動の特徴付ける重要な学外学習として継続された。

Ⅲ. カリキュラムと運営の変遷

1. 混合編成期（1985年度～2014年度）

留学生別科の設置当初から、2014年度までは、別科生と交換留学生が同一の教育課程のもとで学ぶ混合編成が基本的な運用形態であった。この時期のクラス編成は、主として日本語学習時間や日本語能力試験のレベル等を参考にしながら初級・中級・上級という学習段階別の区分

を基準として行われていた。したがって当時のカリキュラムは、文字、語彙、文法など日本語の言語知識を中心とするシラバスで組まれており、当時の日本語教育において一般的であった構造シラバス中心のレベル区分が採用されていた。

しかしながら、初級・中級・上級という区分は、学習内容や教材進度を示す上では有効である一方、学生が具体的な場面において何ができるのかという日本語運用能力を必ずしも明確に示すものではなかった。その結果、クラス設定や日本語運用能力判定が相対的な判断になる場合もあり、学期ごとの学生構成によっては、安定したクラス編成を維持することが困難な場合もあった。

当時のクラス構成について北川（2010）は、次のように述べている。

まず、クラスの数は一七つであるが、クラスレベルの設定は大まかに言って次のようになっている。近年別科生よりも交換留學生のほうが人数が勝っていることから、2クラス～4クラスにおいては、交換留學生を主なメンバーとするシラバスが採用されている。

- 2クラス・・・初級後半
- 3A、3Bクラス・・・中級前期（二つのクラスは大体同レベル）
- 4Aクラス・・・中級後期・交換留學生を主なメンバーとする
- 4Bクラス・・・中級後期・別科生をメンバーとする（進学準備コース）
- 5クラス・・・上級前期（主として進学準備コース）
- 6クラス・・・上級後期（主として進学準備コース）
- （中略）

3A、3B、4A、4Bという中級前半および後半のクラスが設けられているのにも理由がある。海外の日本語教育のレベルが向上するにしたがって、学生の日本語力も飛躍的に向上し、多くの学生は1、2年生のうちに初級レベルを修めたうえで日本へ留学してくる。その結果、中級レベルの需要が高まっている。そのため、07年度前期には3クラスを三つ、08年度前期から3クラスを二つ設け、さらに、08年度後期からは4クラスを2種類設けた。一つは交換留學生対象の4Aクラス、もう一つは別科生対象の4Bクラスである。

表 1：2005 年度後期までのカリキュラム

クラス 単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	選択
別科 5（上級）	日本語		日本語		日本語		日本語		日本語		日本語	日本語	特別 講義 1 B
別科 4（上級）	日本語		日本語		日本語		日本語		日本語		日本語	日本語	
別科 3（中級）	日本語		日本語		日本語		日本語		日本語		日本語	日本語	
別科 2 B（初中級）	日本語		日本語		日本語		日本語						
別科 2 A（初中級）	日本語		日本語		日本語		日本語						

表 2：2006 年度前期～ 2008 年度前期までのカリキュラム

クラス 単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	選択		
別科 6（上級）	日本語		日本語		日本語	日本語		日本語		日本語		日本語	J L P T N 1	J L P T N 2 実 践	J L P T N 2 基 礎
別科 5（上級）	日本語		日本語		日本語	日本語		日本語		日本語		日本語			
別科 4（上級）	日本語		日本語		日本語	日本語		日本語		日本語		日本語			
別科 3B（中級）	日本語		日本語	聴解 3		日本語	会話 3	漢字 3		日本語		精読			
別科 3A（中級）	日本語		日本語			日本語	会話 2	漢字 2		日本語		速読			
別科 1（初級）	日本語		日本語	聴解 2		日本語	日本語	漢字 1		日本語		日本語			

表 3：2008 年度後期～ 2009 年度後期のカリキュラム

クラス 単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	選択		
別科 6（上級）	日本語		日本語		日本語	日本語		日本語		日本語		日本語	J L P T N 1	J L P T N 2 実 践	J L P T N 2 基 礎
別科 5（上級）	日本語		日本語		日本語	日本語		日本語		日本語		日本語			
別科 4（上級）	日本語		日本語		日本語	日本語		日本語		日本語		日本語			
別科 3（中級）	日本語		日本語	聴解 3		日本語	会話 3	漢字 3		日本語		速読			
別科 2（初中級）	日本語		日本語	聴解 2		日本語	会話 2	漢字 2		日本語		精読			
別科 1B（初級）	日本語		日本語	日本語		日本語				日本語		日本語			
別科 1A（初級）	日本語		日本語	日本語		日本語	日本語	漢字 1		日本語		日本語			

表 1 から表 3 は、混合編成期のカリキュラムを表している。当時のカリキュラムは、短期間のうちにクラスの数やレベルが変化し、別科生と交換留学生の学習目的の違いに一定程度配慮しつつも、両者を同一制度内で受け入れていたことが確認できる。

さらに大学の方針で学生交換協定大学が増加するに伴い、交換留学生数が増加していったが、留学生別科に学習目的の異なる学生が同一クラスに在籍する状況が顕著となった。その結果、進学を目的とする別科生は漢字圏の学生が多く、短期留学として日本語・日本文化を学ぶ交換留学生は多国籍であったため両者の間で、求められる学習内容や到達目標に差異が生じることとなった。つまり、進学準備教育を重視すれば、交換留学生のニーズへの対応が不十分となり、反対に文化体験や交流を重視すれば、進学希望者への指導が相対的に弱まるという構造的な課題が存在することとなった。一方で、混合編成には、多文化環境における相互理解の促進や、日本語を媒介語とした実践的なコミュニケーション機会の創出といった教育的利点も認められた。このように、混合編成期は利点と課題が併存する運営形態であったと位置付けることができる。その頃の担当者の悩みを北川（2010）では、以下のように記述している。

留学生別科には別科生と交換留学生という別々の目的を持った学生が存在するが、4A、4B クラス以外のクラスではこれらの学生たちが混在して学習している。

良い点は、留学生別科という場所でお互いの出身を越えて相互理解が深まることである。自分の国の考え方だけでなく、多文化に触れられることは、若者にとって最上の経験となる。コミュニケーション上の媒介言語は英語または日本語が使われており、目標言語である日本語を実際に使用する機会となっている。これはとくに、2～3 クラスレベルで現実にもみられる。

短所と言えるのは、おもに上級クラスにおいて目的別の指導が必要とされるのにも関わらず、教員がどちらかに専念できないことである。現実には、進学目的の学生のニーズを優先するため、交換生のニーズを満たす授業内容を必ずしも提供できず、交換留学生の多くが学部授業に参加することになる。

図1は、別科生と受け入れ交換留学生数の推移を表している。2003年度までは、別科生数が受け入れ交換留学生数を上回っていたが、2004年度以降、受け入れ交換留学生数が徐々に数を伸ばし、2025年度は7倍近くまで数が開いている。このことは、本学の国際交流政策の重点が、進学準備教育から交換留学プログラムへと徐々に移行していたことを示唆している。

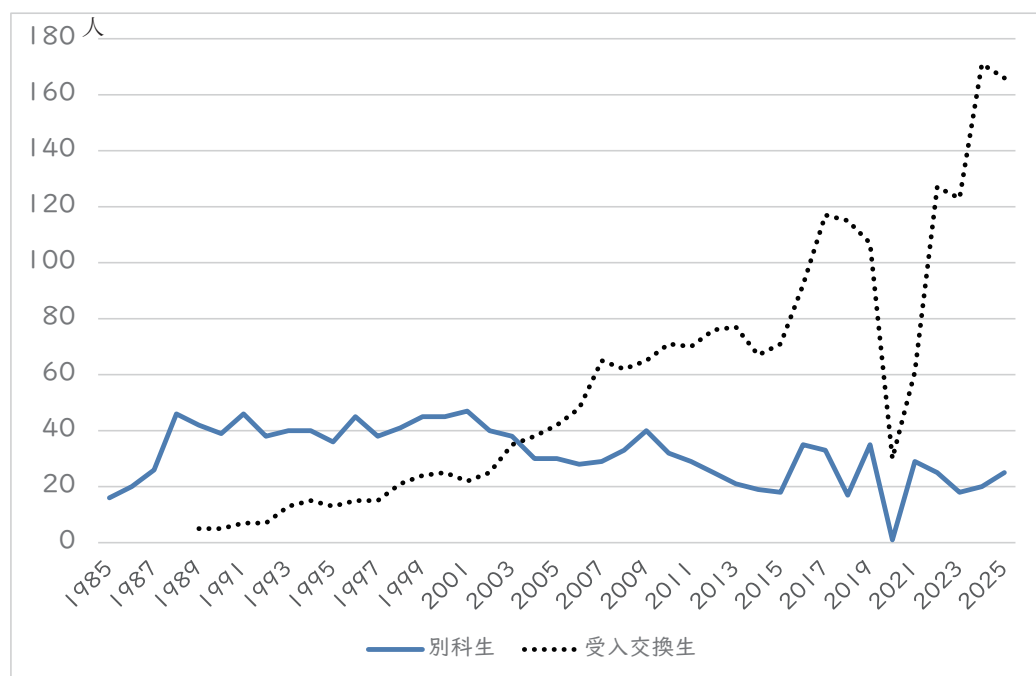


図1 別科生と受け入れ交換留学生数の推移
(グローバル教育推進センター留学関連統計資料集より作成)

こうした状況を踏まえ、2015年度のカリキュラム改革において、別科生と交換留学生各々を独立したプログラムとして改組する方向へと移行した。

2. 独立編成期（CEFR 導入によるプログラム改革の経緯）

前章で述べたように留学生別科では、2015年3月まで交換留学生と別科生を7クラス編成で同じプログラムの中で受け入れてきたが、2015年度より交換留学生の増加に伴いそれぞれ独立した別のプログラムとして改組した。これにより、従来の混合編成は見直され、留学生別科は3クラス編成のプログラムに、交換留学生は6クラス新プログラム（JEP Kyoto Japanese Experience Program in Kyoto 以下、JEP Kyoto）に再編成改組した。

この改革において重要であったのは、留学生別科・JEP Kyoto 両プログラムとも従来の「初級・中級・上級」という区分から「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment) (以下 CEFR) を参照したレベル設定へと移行した点である。

CEFR は、ヨーロッパの平和構築を目的に 1949 年に設立された欧州評議会が 2001 年に公表した言語教育の共通参照枠であり、A1 から C2 までの 6 段階で言語能力を記述するものである。その特徴は、学習者の能力を、文法事項や文字、語彙など言語の知識量ではなく、社会的な場面において何ができるかという can do statements もしくは illustrative descriptors と呼ばれる例示的能力記述文 (以下、Can-do) で示した点にあり、これは両プログラムの運営にも有用な示唆を与えると考えた。

例えば、この枠組みを参照することにより、クラスの目標や到達レベルを学生、教員、プログラム運営者の間での共有が促進された。特に、半期ごとに新生が入学し、その都度プレイスメントを行う両プログラムにおいては、学生の能力分布に応じてクラス編成が変動することが避けられない。そのような状況において、CEFR のレベル記述を参照することは、クラス編成に一定の客観性と透明性を与えるものであった。

また、シラバス作成においても、Can-do 記述は有効であった。各科目の到達目標を「何を学ぶか」ではなく「何ができるようになるか」という観点から設定することで、教育目標と評価方法を結びつけやすくなった。さらに、学生には学期開始時および終了時に自己評価チェックリストを用いた振り返りを行わせ、学生自身が自らの日本語能力を把握し、今後の学習課題を認識する機会を設けた。これは、別科修了後も日本語学習を継続する学生に対し、内省と自律的な学習姿勢を促す意義を持つものであった。

CEFR では、学習者を社会的に行動する者、すなわち social agents として捉えている。別科生は、単に教室内で日本語を学ぶ存在ではなく、日本で生活し、入学試験を受け、入学手続や、履修登録を行い、大学生活に参加する存在である。そのため、留学生別科における日本語教育には、受験対策に限定されない実践的な言語運用能力の育成が求められた。

さらに、このプログラム改革を機に、プレイスメントテストも 2014 年度までのやり方から 2015 年以降は、進学後の学修に必要な口頭によるコミュニケーション能力を念頭に JF ロールプレイテスト*¹の結果を重視するとともに日本留学試験対策も配慮し、SPOT*²、クローズテスト、文法、読解、作文、文字・語彙*³、作文を組み合わせた筆記試験に変更した。この CEFR を参照した留学生別科の改革は、従来の知識中心の日本語教育から、高等教育機関で学ぶための日本語運用能力を重視する教育への転換であった。

表 4：独立編成期の留学生別科のカリキュラム

2015年前期～2025年後期														
クラス	レベル	単位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
別科 6	B2.1以上		視聴解		口頭表現		やりとり		読解		文章表現		文法	HR
別科 5	B1.2		視聴解		口頭表現		やりとり		読解		文章表現		文法	HR
別科 4	B1.1		視聴解		口頭表現		やりとり		読解		文章表現		文法	HR
別科 3	A2.2		視聴解		読解		総合			文章表現		文法	HR	

表 4 は、独立編成期の留学生別科のカリキュラムを表している。別科 3 から別科 6 までの 4 クラスが記載されているが、開講クラス数は 3 クラスとの制約があり、プレイスメントテストの結果から別科 3 から別科 6 のクラスの中で 3 クラスを開講せざるを得なかったため、レベル調整する必要もあった。

Ⅳ．避難民・難民学生の受け入れ

本学では、自国の政変、紛争、迫害等の影響から他国への避難を余儀なくされ、学修機会を喪失した避難民・難民学生を日本において受け入れることは、長期計画「龍谷大学基本構想 400」に基づくグローバル戦略の一環であり、「仏教 SDGs」の理念を体現する重要な使命の一つであるとみなしている。^{*4}とりわけ 2022 年 2 月 24 日にロシアのウクライナ侵攻が開始され、日本政府のウクライナ情勢への対応を契機として、本学は学長名・グローバル教育推進センター長連名による「ロシアによるウクライナ侵攻にかかる声明」^{*5}を发出し、人道支援の一環としてウクライナからの学生受け入れを進めた。その後、「パスウェイズ・ジャパン」を活用し、ウクライナをはじめシリア、アフガニスタン等からの避難民・難民の学生を留学生別科が受け入れ、日本語教育および生活支援を提供してきた^{*6}。その経緯は以下の通りである。

受け入れの第 1 段階として、2021 年度に本学にオンラインで交換留学生として在学したキウ大学の学生を特別に交換留学生として受け入れた。続いて、人道支援「日本・ウクライナ大学パスウェイズ」を活用し 2022 年後期 6 名の入学を許可した。このうち 1 名は辞退し、1 名は日本語能力が留学生別科受講のレベルに達していなかったため JEP Kyoto で受け入れ、4 名が留学生別科生として在籍した。これらの学生は、特定活動、定住者、留学生の在留資格により在籍し、最長 2 年間、留学生別科において日本語教育を受けることとなった。

2023 年 4 月にはウクライナ人 4 名、2024 年 4 月にウクライナ人 4 名およびシリア人 1 名、2025 年 4 月にはウクライナ人 2 名およびアフガニスタン人 1 名が留学生別科に入学している。

本学は受験料、入学金の免除、特別援助奨学金による学費免除等を行うとともに、「学生グローバルサポーター」による生活面の支援を実施した。また、京都市による宿舍の無償提供など、学外機関との連携による支援も行われた。

学部、大学院がこれらの学生を直接受け入れるには、日本語能力や日本での生活経験の面で一定の準備期間が必要となる場合がある。その点において、留学生別科は、難民・避難民学生

が日本での生活に慣れ、大学での学修や研究に必要な日本語能力を身につけるための受け皿として機能していたといえる。なお、2025年度末をもって留学生別科が廃止されることに伴い、以後は各学部における留学生入試等の枠組みの中で、難民・避難民学生を直接受け入れる体制へと移行することになる。

留学生別科は、本来、私費留学生を対象とした進学準備教育機関として設置された。しかし、上記のように設置後約40年を経て、難民・避難民学生を受け入れる教育的インフラとして、機能した点は、特筆に値すると考える。

V. 留学生別科の果たした役割

留学生別科は、設置以来、本学における留学生受け入れの一端を担ってきた。本章では、留学生別科が果たしてきたと考えられる役割について、教育面および制度面の双方から整理する。

1. 進学準備教育

留学生別科の最も重要な役割は、本学の学部、大学院へ進学を希望する優秀な私費留学生に対する進学準備教育であった。

表5：別科生の本学学部・大学院への進学者数

内本学学部入学者（別科推薦）	141名
内本学学部入学者（一般入試）	54名
内本学学部入学者（避難民入試）	4名
内大学院入学者（一般入試）	23名
内大学院入学者（別科推薦）	3名
内大学院入学者（避難民入試）	3名
合計	228名

表5は、別科生の本学学部・大学院への進学者数を表している。設置以来留学生別科入学者数は、避難民学生を含めて1,287名にのぼる。そのうち、本学学部への入学者は、留学生別科推薦による者が141名、一般入試による者が54名、避難民・難民入試によるものが4名である。また、大学院への入学者は、一般入試による者が23名、留学生別科推薦による者が3名、避難民入試による者が3名であり、合計228名が本学の学部または大学院へ進学した。

このことから、留学生別科は、私費留学生に対して日本での大学生活への適応を支援する機能も担っていたといえる。履修登録、図書館等の施設利用、レポート作成、プレゼンテーションなど、日本の大学の学習環境に関する指導を行うとともに、ホームルームや個別相談を通じて生活面や学習面の支援を行ってきた。こうした支援は、単なる日本語運用能力の向上にとどまらず、別科生が大学コミュニティの一員として主体的に学修できる環境を整える上で重要な役割を果たしていたといえる。

また、該当者が多くはないが、就職希望の別科生には本学キャリアセンターが情報提供、模擬面接の実施などの就職活動支援を行ってきた。

2. 大学の国際交流、大学の国際化の推進

留学生別科は、本学の国際化を支える教育的拠点としても機能してきた。「Ⅲ. 1.」でも述べたように、特に設置当初から 2014 年までの混合編成期においては、進学を目的とする漢字圏を中心とした別科生と多国籍である交換留學生が同じ教室で学ぶ教育環境が形成されていた。学習目的や出身国が異なる留學生同士が日本語をはじめ多様な言語を媒介として交流することにより、多様な文化的背景を理解し合う機会が生み出されていた。また、授業内に日本人学生をゲストとして迎えた協働学習や授業外においても寮や大学行事、フィールドトリップへの参加を通じて、留學生相互の交流のみならず、日本人学生との交流の機会も設けられてきた。

こうした活動は、単に日本語学習の補助的活動にとどまるものではなく、交換留學生とともに学内における多文化共生環境の形成に寄与するものであった。留學生別科は、本学の国際化を支える教育的・交流的拠点としても機能してきたといえる。

3. 社会的使命の実践

Ⅳ章でも触れたように、近年において、留學生別科は、従来の進学準備教育機関としての役割に加え、大学の社会的使命を实践する教育基盤としての役割も果たしてきた。2022 年 9 月以降、ウクライナからの学生を受け入れ、その後、シリア、アフガニスタンからの学生も 1 名ずつ受け入れてきた。

難民・避難民学生の多くは、日本語運用能力のみならず、日本での生活経験や進学準備の機会を十分に持たない状況にある。そのため、学部や大学院に直接入学することが難しい場合も少なくない。留學生別科は、こうした学生に対しても日本語教育と生活支援を提供し、日本社会への適応と高等教育への接続を支援する中間的教育機関として機能してきた。これは、留學生別科が持つ教育的機能が人道支援の分野においても有効に活用された事例と位置付けることができる。

また、この取り組みは、「誰一人取り残さない」という本学が掲げる「仏教 SDGs」の理念を具体的な教育実践として体现した取り組みであったと言える。

この点において、留學生別科は単なる進学準備教育機関としての役割を超え、国際社会における人道的課題に対し、大学が教育を通じて応答するための制度的基盤として機能したといえる。

Ⅵ. 留學生別科廃止に至った経緯

留學生別科が廃止に至った背景としては、主として以下の 4 点が挙げられる。

第一に、2024 年 4 月に施行された日本語教育機関認定法（正式名称「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」）への対応である。留學生別科を従来どおり継続する場合、同法に基づく日本語教育機関として認定審査を受けるとともに、継続的な報告義務等に対応する必要がある。しかし、本学の日本語教育運営体制は、2019 年度までは専任教員 3 名、特別任用教員 1 名で運営されていたものの、2020 年度以降は専任教員 2 名、特別任用教員 1 名体制となっている。さらに、2022 年度以降は従来特別任用教員が担っていたプログラムコーディネータ業務を専任教員が担うこととなり、教養教育課程の日本語科目に加え、留學生別科および JEP Kyoto の授業運営・調整業務も担当することとなった。こ

のような状況の下で、現行体制のまま新制度へ対応することは困難であった。

第二に、入学定員の未充足が継続していた点である。新型コロナウイルス感染症の影響を受けた時期を除いても、2009 年度を最後に定員 40 名を満たさない状況が続いていた。志願者数および入学者数の減少は、制度の継続性や財政的基盤に少なからず影響を与えたと考えられる。また、かつては交換留学生との混成ではあったが 7 クラス編成であったものが、2015 年度には 3 クラス編成となるなど、教育運営の規模も縮小していた。

第三に、日本語教育を取り巻く環境変化がある。留学生別科設置当時と比較して、日本への留学生数は増加した一方で、民間日本語教育機関、専門学校等、日本語学習の機会は大幅に拡大した。その結果、留学生にとって進学準備教育の選択肢が多様化し、大学附置の留学生別科に志願者が集中しにくい状況が生じている。

第四に、全国的な再編動向である。関西圏の主要大学においても、2017 年には同志社大学留学生別科、2019 年には近畿大学留学生別科が募集停止となっている。大学の留学生別科は非正規課程として比較的柔軟に設置・改編が可能であることから、社会的需要や大学経営上の判断に応じて再編されやすい制度であったといえる。

以上のように、留学生別科の廃止は、単一の要因によるものではなく、制度改正への対応、人員体制上の制約、定員未充足、日本語教育市場の変化、さらに全国的な大学別科再編の動向が複合的に作用した結果として理解することができる。

一方で、留学生別科の廃止は単なる縮小としてのみ捉えられるものではない。本学では、“RYUKOKU GLOBAL VISION 2023”において、「学生たちが異文化間対話を行えるような多様な機会（外国人留学生の受け入れ・本学学生の派遣留学・国際共修科目開発）を創出し、龍谷大学らしい Magokoro ある地球市民を育むことで世界の平和に寄与することを国際支援部門の大きな目標とする」と掲げている。留学生別科廃止、JEP Kyoto 改編後、新たな“Ryukoku Japan Studies Program (Magokoro Program)（通称：JSP）”が展開されることとなった。特に日本人学生と留学生が共に学ぶ国際共修科目の開講は、JSP の大きな特徴と捉えられる。末松（2014）は国際共修の意義について次のように述べている。

さまざまな言語・文化背景の学生を適切な教育介入をもって有機的に結び付けることで、学生らが自分にとって馴染みのない「異」にぶつかり、葛藤し、最終的には理解・寛容という過程を経て、自分かとの相違点や共通点を探りながら己を見つめ直す機会づくりが可能となる。国際共修は、日本人学生、留学生の双方にとって有益な教育要素を含む一石二鳥教育として今後の発展が期待される。

JSP では、本学の国際教育は新たな段階へと移行しつつある。この意味において、留学生別科の廃止は、大学による日本語予備教育そのものの終焉を意味するものではない。むしろ、大学附置機関である留学生別科を中心とする従来型の留学生受け入れモデルから、国際共修を核とした新たな国際教育モデルへの転換として理解することができる。

VII. おわりに

本稿では、1985 年の龍谷大学留学生別科の設置から廃止に至るまでの沿革を、制度的背景、

カリキュラムと運営の変遷、避難民・難民学生の受け入れ、果たしてきた役割、廃止に至った経緯の観点から整理した。

留学生別科は、その40年の歴史の中で、進学準備教育機関、国際交流の拠点、そして難民・避難民支援の教育基盤として多面的な役割を果たしてきた。2026年3月末の廃止によって制度としては幕を閉じるが、その理念と実践はJSPをはじめとする本学の留学生教育・国際化教育へ継承されるものと考えられる。本学留学生別科の歴史は、一大学の教育課程の変遷にとどまらず、大学における予備教育課程の発展と改編の歴史を映し出す事例として位置付けることができる。

最後に、本学留学生別科の運営に長年ご尽力いただいた教職員ならびに非常勤講師の方々に謝意を表す。留学生別科設置以来約40年にわたり、授業担当およびプログラム運営を通じて別科生の学修および生活を支え、教育の質の維持・向上に寄与してこられたことに對し、深く感謝する。留学生別科がその役割を終えることができたのは、こうしたご尽力によるところが大きい。ここに記して謝意を表する次第である。

注

- * 1 SPOT: Simple Performance-Oriented Test の略で、筑波大学留学センターが開発したWEB上で日本語の文法、語彙などの日本語のレベルを短時間に測定するテストである。
- * 2 JF ロールプレイトスト: 会話形式でやり取り能力を1人15分程度で測り、CEFRに基づくレベル判定を行うテストである。
- * 3 文字・語彙試験は、2021年度より実施していない。
- * 4 <https://www.ryukoku.ac.jp/refugee-support/about.html>
- * 5 <https://www.ryukoku.ac.jp/nc/news/entry-10091.html>
- * 6 2022年4月現在「日本・ウクライナ大学パスウェイズ」を活用し受け入れを表明している教育機関は、本学を含め30大学。日本語学校4校、JSUS（「ウクライナ学生支援会」）参加の日本語学校7校である。

引用・参考文献

- アルク教育総合研究所・監（2015）『グローバル教育を考える』アルク
- 奥村三菜子、櫻井直子、鈴木裕子編著（2016）『日本語教師のためのCEFR』くろしお出版
- 北川逸子（2010）「龍谷大学留学生別科における日本語教育の改革の取り組みについて」『龍谷大学国際センター研究年報』第19号、pp.3 - 15
- 公益財団法人 アジア学生文化協会（2024）「留学生別科の再生は可能か」『アジアの友』第559号、pp.2 - 29
- 櫻井直子、奥村三菜子（2024）『CEFR-CV とことばの教育』くろしお出版
- 末松和子（2014）「キャンパスに共生社会を創る—留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて—」『ウェブマガジン 留学交流』2014年9月号 Vol.42（2026年3月31日閲覧）p.12
- https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201409suematsukazuko.pdf
- 末松和子（2019）「国際共修の検証—文献リサーチを通して見えてくるもの—」『ウェブマガジ

ン留学交流』2019年2月号 Vol.95 (2026年3月31日閲覧)

https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2018/__icsFiles/afiedfile/2021/02/19/201902ryugakukoryu.pdf

三原龍志 (2018) 「JEP Kyoto プログラム開発とその経緯」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』27pp.91 - 102

文部科学省「学制百二十年史」(2026年3月31日閲覧)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-2.htm

龍谷大学国際センター (1996) 「龍谷大学国際センター交流史」『龍谷大学国際センター研究年報』第5号、pp.87 - 88

龍谷大学 "RYUKOKU GLOBAL VISION 2023" (2026年3月31日閲覧)

https://intl.ryukoku.ac.jp/zx_documents/global_ver2023/rgb_2023.pdf

龍谷大学留学生別科 (2006) 「龍谷大学留学生別科の動き」『留学生別科20年の歩み』、p.3

グローバル教育推進センター活動記録・データ集（Web 版）
詳細データは下記 QR コードよりご覧いただけます。



龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報 第35号

2026年 6 月発行

編集 龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報編集委員会

発行 龍谷大学グローバル教育推進センター

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075-645-7898

印刷 株式会社 田中プリント

ISSN 2424-1067

Ryukoku University Center for the Promotion of Global Education Research Bulletin

Vol. 35

June, 2026

Contents

(Articles)

Tips on Reading News as English Language Learning Materials

..... NAGATOMI Kazuaki 1

(Research Notes)

1. A History of the Studies of *Myokonin* KADOOKA Ken-Ichi 17

2. The History of Ryukoku University's Japanese Culture and Language Program (JCLP)
for International Students: From Its Establishment in 1985 to Its Closure in 2026
..... MIHARA Ryushi 35